先　ノ　原　遺　跡

―１～３次調査―

福岡県春日市原町所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第63集

２０１２

春日市教育委員会

先　ノ　原　遺　跡

―１～３次調査―

福岡県春日市原町所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第63集

２０１２

春日市教育委員会

先ノ原遺跡 1 次調査全景（南から）

先ノ原遺跡 1 次調査道路遺構 1 検出状態

先ノ原遺跡 3 次調査 2 号溝鉄剣出土状態（東から）

序

本書は、航空自衛隊基地内の発掘調査によって発見された先ノ原遺跡の文化財調査報告書です。

春日市は福岡県内で最も面積の小さな市ですが、市域の全体に多くの遺跡が眠る悠久の歴史を秘めた文化の街でもあります。特に須玖岡本遺跡をはじめとする弥生時代の重要遺跡が密集し、弥生の里として全国的に知られているところです。

古来、福岡平野は大陸文化受容の玄関口として発展してきた地域ですが、このたび、本書によって報告いたします先ノ原遺跡では、古代の迎賓館である鴻臚館と大宰府とを結ぶ官道の跡が発見され、奴国以降の時代においてもなお、わが市が重要な地域であったことを示しています。

貴重な遺跡の調査報告書としては、不十分なものではありますが、本報告書により、発掘調査の成果が広く世に知られ、当地域の古代史の一端を明らかにする研究材料として活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理までに御指導、御協力を賜りました多くの方々に厚くお礼申しあげます。

平成24年３月31日

春日市教育委員会
教育長　山　本　直　俊

例　　言

1　本書は、春日市原町３丁目の航空自衛隊春日基地内において、春日市教育委員会が実施した先ノ原遺跡１～３次調査の発掘調査報告書である。本遺跡では平成２年に実施した１次調査以来、４回にわたって発掘調査を行っている。当市教委では平成15年に遺跡地図の作成に際し、遺跡名称の整理を行い、調査時には先ノ原遺跡１次・３次としていたものを先ノ原・春日公園内遺跡（先ノ原Ａ遺跡）に、先ノ原遺跡３次を先ノ原Ｂ遺跡と遺跡名を変更し、以後はこの名称を用いてきた。しかし、今回、本遺跡の調査報告書を刊行するに当たって遺跡名の再整理を行い、以下の通り変更した。

調査時の名称(調査年次)	埋蔵文化財包蔵地カード登録名称（平成16年）	本報告書
先ノ原遺跡（平.２）	先ノ原・春日公園内遺跡	先ノ原遺跡　１次
先ノ原遺跡２次（平.３）	先ノ原Ｂ遺跡	先ノ原遺跡　３次
先ノ原遺跡３次（平.３）	先ノ原･春日公園内遺跡　２次	先ノ原遺跡　２次
先ノ原Ｂ遺跡（平.16）	先ノ原Ｂ遺跡　２次	先ノ原遺跡　４次

2　遺構については、発掘調査時の実測を吉田佳広が行い、製図を伊東ひかり、吉富千春、牧平佳恵が行った。

3　遺物については、実測を柳智子、島津屋幸子、吉富が行い、製図を柳、島津屋、吉田、久家春美が行った。

4　遺構写真は吉田、篠原浩之（現・朝倉市教育委員会）が担当し、空中写真は㈲空中写真企画に委託した。遺物写真については㈲文化財写真工房（岡紀久夫）に撮影を委託した。

5　本書に使用した５万分の１地形図は、国土交通省国土地理院発行の『福岡』である。

6　本書の遺構実測図に用いた方位は、座標北である。２次調査では基準点測量を㈱アジア航測に委託した。１・３次調査では座標データに不備があり、地形図などから図上復元を行ったため、調査地点の位置にかなりの誤差が生じている可能性がある。調査報告の信憑性を損なったことをお詫びいたします。

7　３次調査で出土した鉄剣の保存処理は㈱京都科学に委託した。

8　本書の執筆は、吉田、柳、島津屋が担当し、編集は執筆者の協力の下に吉田が行った。

9　本書に用いた分類は以下のとおり。

陶磁器…太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡Ⅳ』(2000)

土師質・瓦質土器…山村信榮「大宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』(1990)

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……1
1．調査に至る経過……1
2．調査の組織……1
Ⅱ　位置と環境……3
Ⅲ　1次調査の内容……8
1．調査の概要……8
2．遺　構……8
（1）溝……8
（2）道　路……14
（3）通行痕跡……16
（4）ピット……18
（5）包含層……18
3．遺　物……18
（1）土器・瓦……18
（2）小　玉……26
（3）石　器……26
4．小　結……26
Ⅳ　2次調査の内容……27
1．調査の概要……27
2．遺　構……27
（1）溝……27
（2）道　路……33
（3）通行痕跡……34
（4）ピット……35
（5）包含層……35
3．遺　物……35
（1）土器・瓦……35
（2）石　器……40
4．小　結……40
Ⅴ　3次調査の内容……42
1．調査の概要……42

2．遺　構……42
（1）溝……42
（2）道　路……48
（3）ピット……48
（4）包含層……48
3．遺　物……48
（1）土器・瓦・土製品……48
（2）鉄　剣……53
（3）石　器……54
4．小　結……55
Ⅵ　まとめ……57

図　版　目　次

巻頭図版1　先ノ原遺跡1次調査全景（南から）
2　先ノ原遺跡1次調査道路遺構1検出状態
先ノ原遺跡3次調査2号溝鉄剣出土状態（東から）
図　版1（1）先ノ原遺跡1次調査全景
（2）道路遺構1検出状態
図　版2（1）道路遺構1黄白色砂・暗灰色砂質土層除去状態（南から）
（2）道路遺構1土層（南から）
図　版3（1）通行痕土層（南から）
（2）1・2号溝土層（南から）
図　版4（1）3・4号溝土層（南から）
（2）5号溝土層（南から）
図　版5（1）11号A溝土層（南から）
（2）11号B溝土層（南から）
図　版6　1・5・6～10号溝及びピット出土土器・瓦
図　版7　道路面出土土器
図　版8　包含層出土土器・瓦
図　版9　包含層及び攪乱出土土器・瓦、小玉、石器
図　版10（1）先ノ原遺跡2次調査全景
（2）道路遺構

図　版11(1)　道路遺構（北から）
　　(2)　調査区西半道路部分（北から）
図　版12(1)　通行痕土層（北西から）
　　(2)　通行痕土層（北西から）
　　(3)　通行痕土層（北西から）
図　版13(1)　1号溝土層（北から）
　　(2)　2号溝土層（北から）
　　(3)　4号溝土層（南から）
図　版14(1)　6号溝土層（南から）
　　(2)　7号溝土層（南から）
　　(3)　11号溝土層（北から）
図　版15(1)　12号溝土層（北から）
　　(2)　13号溝Q−Q′土層（北から）
　　(3)　13号溝R−R′土層（北から）
図　版16　2・4・6号溝及びピット出土土器・瓦
図　版17　包含層出土土器・瓦
図　版18　包含層出土土器、石器
図　版19(1)　先ノ原遺跡3次調査全景（北西から）
　　(2)　先ノ原遺跡3次調査全景（南東から）
図　版20(1)　1号溝土層（北西から）
　　(2)　2号溝鉄剣・弥生土器出土状態（北から）
図　版21(1)　2号溝鉄剣出土状態（北から）
　　(2)　2号溝鉄剣出土状態（東から）
図　版22(1)　事前調査時鉄剣出土状態（南から）
　　(2)　事前調査時鉄剣出土状態（北西から）
図　版23　1号溝出土土器・瓦
図　版24　2号溝出土土器、鉄剣
図　版25　1・5・6号溝及びピット、包含層出土土器・瓦、石器
図　版26　2号溝出土鉄剣X線写真

挿 図 目 次

第１図　先ノ原遺跡と周辺の遺跡……4
第２図　先ノ原遺跡周辺遺跡分布図……5
第３図　先ノ原遺跡１～３次調査区位置図……6
第４図　１次調査遺構配置図……9～10
第５図　土層実測図①……11
第６図　土層実測図②……13
第７図　道路遺構実測図……15
第８図　通行痕実測図……17
第９図　溝出土土器実測図……19
第10図　道路遺構出土土器実測図……20
第11図　ピット出土土器実測図……21
第12図　包含層出土土器実測図……22
第13図　包含層及び攪乱出土土器実測図……23
第14図　小玉実測図……26
第15図　石器実測図……26
第16図　２次調査遺構配置図……29
第17図　土層実測図①……30
第18図　土層実測図②……31
第19図　土層実測図③……32
第20図　通行痕実測図……34
第21図　溝出土土器実測図……36
第22図　ピット出土土器実測図……37
第23図　包含層出土土器実測図①……38
第24図　包含層出土土器実測図②……39
第25図　石器実測図……40
第26図　３次調査遺構配置図……43～44
第27図　土層実測図……45～46
第28図　２号溝実測図……47
第29図　１号溝出土土器実測図……49
第30図　２・５・６号溝出土土器実測図……50
第31図　ピット出土土器実測図……51

第32図　包含層出土土器実測図……52
第33図　鉄剣実測図……53
第34図　石器実測図……54

表　目　次

表１　１次調査出土土器観察表……24～25
表２　２次調査出土土器観察表……41
表３　３次調査出土土器観察表……56

Ⅰ はじめに

1．調査に至る経過

先ノ原遺跡の発掘調査は、いずれも航空自衛隊春日基地内における土木工事に伴い、福岡防衛施設局からの受託事業として春日市教育委員会が実施したものである。

1次調査は、平成2年7月初旬に福岡防衛施設局より、車両整備工場新設の計画に伴って、文化財に関する問い合わせを受けた。対象地は大宰府から水城西門を経て鴻臚館とを結ぶ古代官道の想定線上にあり、春日公園や九州大学筑紫キャンパス内における調査成果等から、工事予定地に官道が横断している可能性は極めて高いものと予想された。7月25日、26日に試掘調査を行ったところ、奈良時代の須恵器及び土師器を含む溝、小穴、遺物包含層等を検出した。このため、福岡防衛施設局と協議を重ね、同年10月23日から工場建設予定地1,480㎡の発掘調査を実施した。

2次調査は、平成4年に1次調査地点の南側にほぼ隣接して音楽隊訓練場の新設工事が行われることから、これに先立って平成3年10月19日から訓練場建設予定地902㎡の発掘調査を実施した。

3次調査は、平成2年12月に春日市下水道課より、航空自衛隊春日基地内において大規模な排水路築造計画があることから、文化財に関する問い合わせを受けた。福岡防衛施設局・春日市下水道課・春日市文化財課の三者協議を行い、平成3年1月12日から15日にかけて試掘調査を実施したところ、対象地の北部において官道と方向性が近似する溝状遺構等を検出した。このため、平成3年4月25日からボックスカルバート埋設部分の内、遺構が確認された約800㎡の範囲を対象に発掘調査を実施した。

2．調査の組織

春日市教育委員会が発掘調査を実施した平成2・3年度、報告書作成を行った平成23年度の調査体制は以下のとおりである。

発掘調査（平成2年度）

教育長	三原英雄
教育部長	西田　譲
社会教育課長	矢野文一
文化財係長	鬼倉芳丸
主　事	坂本智明
技　師	丸山康晴
	平田定幸

発掘調査（平成3年度）

教育長	三原英雄
教育部長	西田　譲
文化課長	矢野文一
文化財係長	鬼倉芳丸
主　事	坂本智明
	筒井清昭
技　師	丸山康晴

	中村昇平		平田定幸
	吉田佳広		中村昇平
嘱　託	池田洋子		吉田佳広
		嘱　託	池田洋子

報告書作成（平成23年度）

教育長		山本直俊
社会教育部長		古賀俊光
文化財課長		廣瀬貴之
管理・文化財統括係長		中村昇平
管理担当	課長補佐	平田定幸（～４月）
	主　査	増永聡司
	主　任	山田ひとみ
	主　事	佐伯廣宣
文化財担当	主　査	吉田佳広
	主　査	森井千賀子
	主　任	井上義也
	嘱　託	島津屋幸子
	嘱　託	柳　智子
	嘱　託	上原あい

発掘調査に際しては、福岡防衛施設局並びに航空自衛隊春日基地の隊員諸氏に多大な御理解・御協力をいただきました、厚くお礼申し上げます。

なお、発掘調査はじめ整理作業について、福岡県教育委員会、九州歴史資料館、太宰府市教育委員会、筑紫野市教育委員会ほか関係機関の多くの方々に御指導並びに御教示いただきました。ことに、太宰府市教委山村信榮氏には調査中の現場に幾度と足を運んでいただき、貴重な情報を聞かせていただきました。ここに記して深甚の謝意を表します。

Ⅱ　位置と環境

先ノ原遺跡は福岡県春日市原町３丁目（航空自衛隊春日基地内）に確認された遺跡である。

博多湾に面した福岡平野は、脊振山地から発する那珂川と三郡山系を源とした御笠川が北流する沖積平野であり、この両川の周辺の丘陵部や台地には多くの遺跡が確認されている。わが国において最も早く弥生文化が定着した地であり、中国の史書が記す奴国の故地に比定されている。古来、大陸文化受容の窓口となり、国家成立期より外交の要衝として重要な位置を占めていた。

春日市はこの平野の南部に位置する面積14.15㎢の都市である。春日市のほぼ中央には、南方の脊振山系から派生した春日丘陵が南北にのび、数多くの遺跡が連続して確認されている。特に弥生時代の遺跡については、遺跡の集中度・内容ともに周辺地域に比べ群を抜くもので、須玖遺跡群と呼称されるこの地域が奴国の中心地であったことは疑いのないところである。

先ノ原遺跡は春日丘陵の南東部に隣接する支丘の東裾にあり、ここより東側には低平な平坦地が大きく広がっている。春日市域では早い段階に市街化したところであり、太平洋戦争後は米軍基地として接収され、復帰後は航空自衛隊春日基地として現在に至っている。なお、先ノ原遺跡の北西に隣接する立石遺跡[注11]においては、青銅器を副葬する弥生時代の墳墓の存在が知られ、須玖岡本遺跡に次ぐ有力集団の墓地と考えられている。

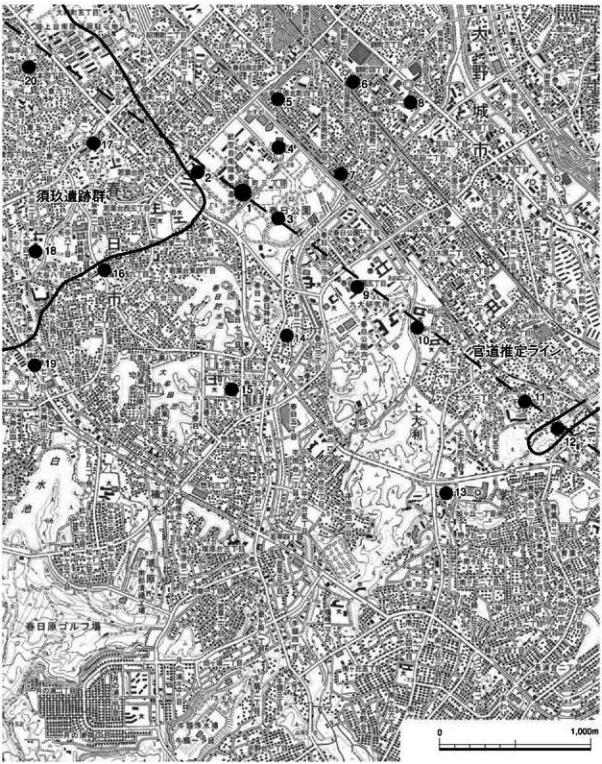
古墳時代以降は大和朝廷がほぼ全国を配下に治め、６世紀に至っては、那津のほとりに「筑紫官家」が置かれたとされる。この地域は大和朝廷による対外交渉の前進基地となり、後の大宰府に引き継がれる。本市でも７世紀の白村江の戦での敗戦を契機に築かれた大土居水城跡[注12]、天神山水城跡など大宰府に関連する遺跡が知られている。

また、集落跡や墳墓のほかにも市の南部においては、須恵器窯跡である浦ノ原窯跡群[注13]や惣利窯跡[注14]などが認められ、これらは牛頸窯跡群の一角を占めるものである。さらに、古代寺院に瓦を供給したと考えられるウトグチ瓦窯跡[注15]の存在は注目されるところである。

一方、先ノ原遺跡の南方約200ｍに位置する春日公園内遺跡[注16]では、昭和53年に福岡県教委によって大宰府の水城西門から鴻臚館へと通じる官道が調査された。九州では初めての古代道路の検出例であり、これ以後は、福岡県下の各地で古代道路遺構が発見されることとなる。先ノ原遺跡はまさにこの官道推定ライン上にあり、事前調査の段階より官道に関する遺構の検出が期待されていた。この他、官道（西門ルート）関連の遺跡として水城西門から北方では九州大学・御供田遺跡[注17]、大野城市の池田遺跡[注18]、谷川遺跡[注19]などが調査されている。

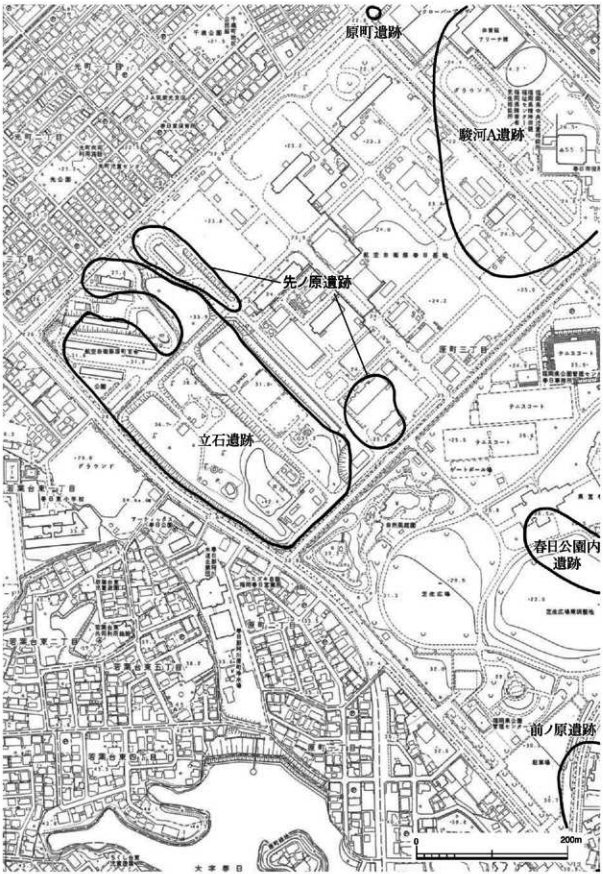
近世以降の遺跡については、当市ではあまり発掘調査例が多くないが、市域西部の遺跡では上白水村落形成の核になったと考えられる上白水館跡が確認されている。また、下白水の旧村落内には筑紫氏家臣の天浦城が存在していたと考えられている。

なお、春日市教委では平成16年に先ノ原遺跡３次調査地点の北隣地において４次調査を実施してい

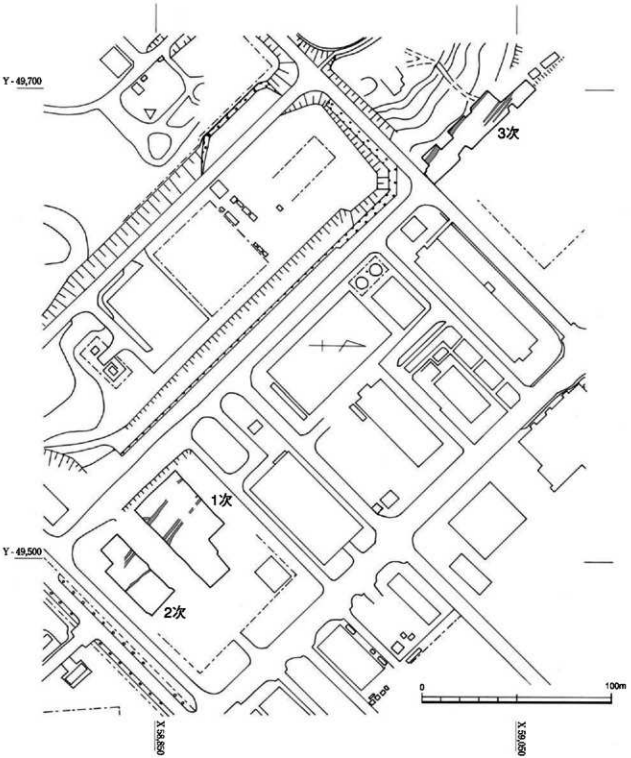


1 先ノ原遺跡　2 立石遺跡　3 春日公園内遺跡　4 駿河A遺跡　5 駿河B遺跡
6 駿河C遺跡　7 原ノ口遺跡　8 石勺遺跡　9 九州大学・御供田遺跡　10 池田遺跡
11 谷川遺跡　12 水城跡(西門)　13 上大利水城跡　14 春日水城跡　15 惣利西遺跡
16 小倉水城跡　17 伯玄社遺跡　18 大谷遺跡　19 大土居水城跡　20 須玖岡本遺跡

第1図　先ノ原遺跡と周辺の遺跡（1/25,000）



第２図　先ノ原遺跡周辺遺跡分布図（1/5,000）



第３図　先ノ原遺跡１～３次調査区位置図（1/2,000）

る。西側溝の延長部分を検出したが、ここでは東側溝は確認できなかった。削平によって消失したものか、あるいは当初から丘陵下のみに側溝を通して反対側は切り放した状態であったのか、道路の構造に関しては、なお慎重な検討を要し、これについては今後の課題としたい。

註1　春日市教育委員会『立石遺跡』春日市文化財調査報告書第34集　2002
註2　春日市教育委員会『大土居水城跡』春日市文化財調査報告書第28集　2000
註3　春日市教育委員会『浦ノ原窯跡群』春日市文化財調査報告書第11集　1981
註4　春日市教育委員会『春日地区遺跡群Ⅰ』春日市文化財調査報告書第12集　1982
註5　春日市教育委員会『ウトグチ遺跡B地点』春日市文化財調査報告書第39集　2004
註6　春日市史編纂委員会『春日市史』上　1995
註7　九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室『九州大学埋蔵文化財調査報告－九州大学筑紫地区遺跡群－』(第一冊)　1992
註8　大野城市教育委員会『谷川・池田・池ノ上遺跡』大野城市文化財調査報告書第51集　1998
註9　春日市教育委員会『春日市埋蔵文化財年報13』　2006

Ⅲ　1次調査の内容

1．調査の概要

先ノ原遺跡1次調査地点は、春日丘陵の東縁に並行する小丘陵の東側に広がる平坦部に立地している。航空自衛隊春日基地内の南東部に新設される車両修理工場建設予定地1,480㎡を対象として、平成2年10月23日から同年12月29日にかけて発掘調査を実施した。遺構面の標高は24.0mを測る。前述した通り、当地は官道推定線上にあるため、試掘調査では道路縁溝の検出を念頭に、官道推定線に対して直交するかたちで東西方向に2本の試掘溝を設定したところ、対象地の東部に奈良時代の須恵器及び土師器を含む黒色粘質土の遺物包含層、西部において幅80cm程度の浅い溝状遺構、ピットなどを確認した。

発掘調査に際しては、初めに大型の重機を使用して、対象地全体に施された分厚いコンクリート舗装及び基礎の除去を行った。さらに直下に敷き詰められた栗石を除去すると、砂粒を多く含む黄褐色土を主体とした地山が表われ、遺構が確認された。地形的には東方向に暫時低くなっており、地山の状況も東部ではシルト質に近いものになる。

検出した遺構としては、溝11条（内、1条は自然流路）、ピットがあり、道路や通行痕と認められる部分が存在する。既存建物の基礎による遺構の撹乱が著しく、分断・消失した遺構も多かったが、調査区の西部に検出した官道西側溝1・2号溝と東側溝3・4号溝の間には黄白色砂が3～4cmの厚さで敷き詰められ、ガチガチに硬化した状況が確認された。発掘調査時点ではこの部分のみを官道の路面として認識していた。

出土遺物としては、土器、陶磁器、瓦、石器などが存在する。

2．遺　構

調査で確認できた重複する遺構の新旧関係は次に示したとおりである。

8号溝→1号溝←2号溝

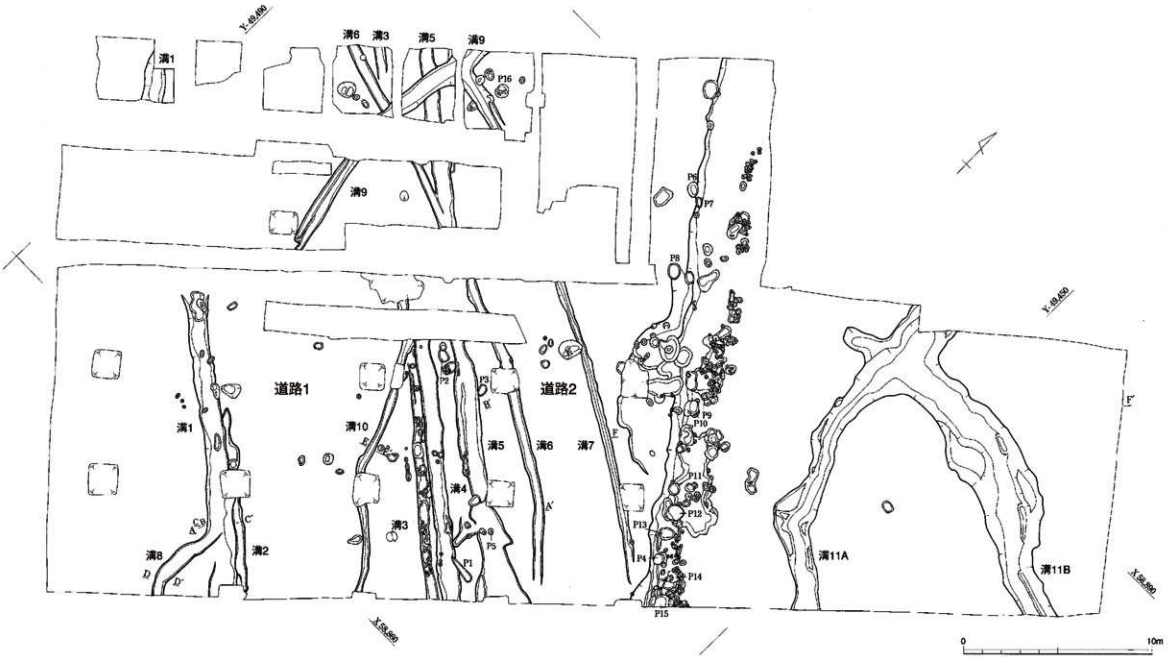
10号溝←3号溝・4号溝

7号溝→9号溝←6号溝←5号溝

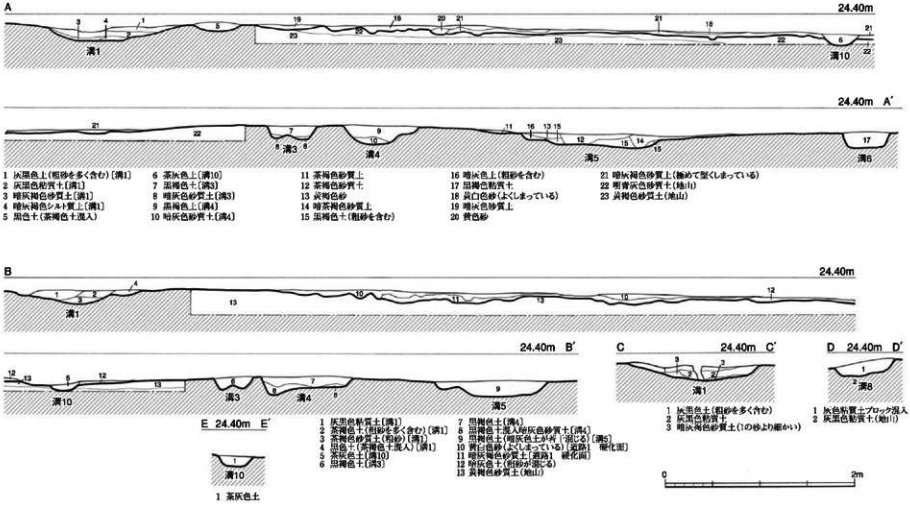
（1）溝

1号溝（図版1－(2)・3－(2)、第4・5・7図）

調査区西側に位置し、長さ29.5mを検出した。8号溝と当溝に並行する2号溝を切っている。幅0.9～1.5mを測り、溝の深さは16.0～19.0cmである。東側から砂粒を多く含む土砂が流れ込んでおり、



第４図　１次調査遺構配置図（1/200）



第５図　土層実測図①（1/40）

最終的には黒色粘質土に覆われて８世紀後半に埋没したものと見られる。官道の西側溝と考えられる。

出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器、縄目瓦がある。

２号溝（図版１－(2)・３－(2)、第４・７図）

調査区西側に位置し、長さ9.9mを検出した。並行する１号溝より古い。幅0.42～0.7m、深さ４～10.5cmを測る。覆土は茶褐色土を混入する黒色土である。

出土遺物は土師器である。官道西側溝である。

３号溝（図版１－(2)・４－(1)、第４・５・７図）

調査区中央南側に位置する官道東側溝で、長さ29.8mを検出した。幅0.4～0.55mを測る。溝は深さ４～８cmと浅く、溝底が幅20～30cm、深さ３～９cmほどの楕円形の凸凹状を呈す。埋土は黒褐色土で、溝底の凸凹は暗灰色砂質土である。

遺構検出時では４号溝との切り合いが明確ではなく、調査当初は１条の溝として掘り下げ、遺物の取り上げを行った。遺構完掘後、溝が２本に分かれることが確認できたことから、東側の溝を３号溝、西側の溝を４号溝として報告を行う。なお、３・４号溝の新旧関係は確認できなかった。また、実測図整理時の検討によって調査区北端部に検出した溝の痕跡を３号溝とした。

出土遺物は弥生土器と土師器である。

４号溝（図版１－(2)・４－(1)、第４・５・７図）

調査区中央南側に位置する官道東側溝。長さ14.0mを検出した。幅0.75～1.2mを測る。深さ８～16cmを測る。埋土は上層が黒褐色土、下層は暗灰色砂質土である。溝底には20～30cm大の楕円形の凸凹が若干検出された。

出土遺物は弥生土器と土師器である。

５号溝（図版１－(2)・４－(2)、第４・５・７図）

調査区中央南側に位置する官道東側溝。長さ30.0mを検出した。調査区の北部で６・９号溝に切られている。溝の南側は１・２号土坑として調査を行ったが、埋土や検出位置から５号溝と同一遺構と判断し、５号溝として報告を行う。幅0.6～1.25m、深さ８～19cmを測る。

出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器である。

６号溝（図版１－(1)(2)、第４・５・７図）

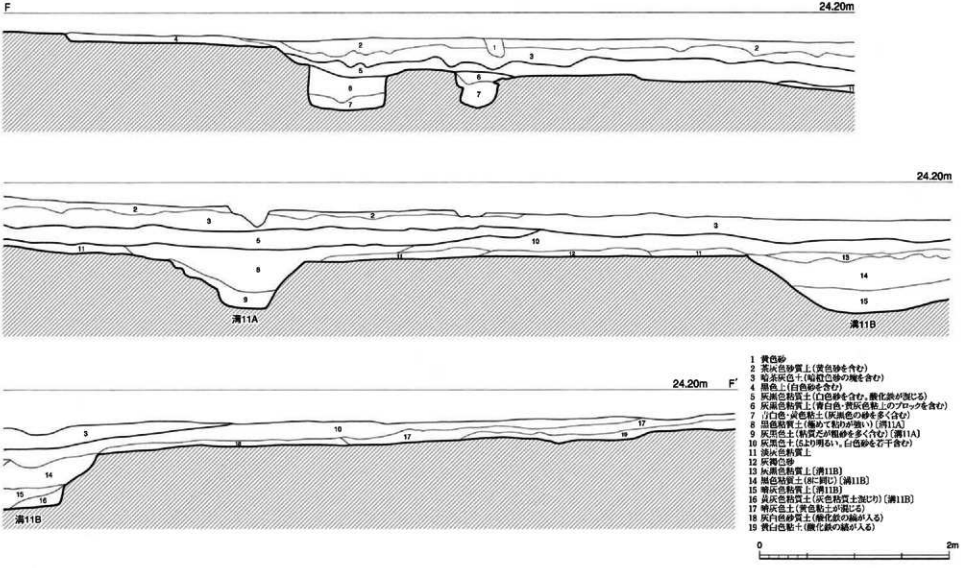
調査区中央に位置し、長さ31.0mを検出した。５号溝を切り、９号溝に切られる。南東から北西方向へ弓なりに延びる形状を呈し、東側の７号溝とは約４mの間を空けて並行する。幅0.4～0.6m、深さ約20cmである。

出土遺物は須恵器、土師器、格子目瓦である。

７号溝（図版１－(1)、第４・７図）

調査区中央に位置し、長さ29.0mを検出した。９号溝に切られる。南東から北西方向へ弓なりに延びる形状を呈し、西側に隣接する６号溝に並行する。

出土遺物は弥生土器、土師器、土師質土器、近世陶磁器である。



第６図　土層実測図②（1/40）

8号溝（図版１－(1)、第４・５図）

調査区西側に位置し、長さ約4.5mを検出した。１号溝に切られる。埋土は灰黒色粘質土及び暗灰褐色砂質土である。南北にやや蛇行する形状を呈し、幅0.55～0.85mを測る。深さは12～16cmで北側に向かって溝底が深くなっており、南から北へ水流があったと想定される。

出土遺物には弥生土器、須恵器や土師器、鎌倉時代後期の白磁がある。

9号溝（図版１－(1)、第４図）

調査区中央北側に位置し、長さ15.0mを検出した。５～７号溝を切っている。幅0.65～1.0m、深さ20～30cmを測る。

出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器、同安窯系青磁椀、近世陶磁器、格子目瓦、滑石製不明石製品である。

10号溝（図版１－(1)、第４・５図）

調査区中央に位置し、長さ15.8mを検出した。３号溝を切る。南から北西方向へ蛇行しながら延びる形状を呈す。

出土遺物は土師器、縄目瓦で、11世紀後半から12世紀中頃に溝が埋没したものと見られる。

11号溝（図版１－(1)・５－(1)(2)、第４・６図）

調査区東側に位置する自然流路である。東部包含層除去後に検出し、北から南へ二股に分岐した形状を呈す。流路は北に向かって幅が広くなり、底が深くなることから、南から北へ水流があったことが分かった。

出土遺物はない。

11号Ａ溝（図版１－(1)・５－(1)、第４・６図）

埋土は黒色粘質土で、下層は粗砂を多く含む灰黒色土が堆積している。

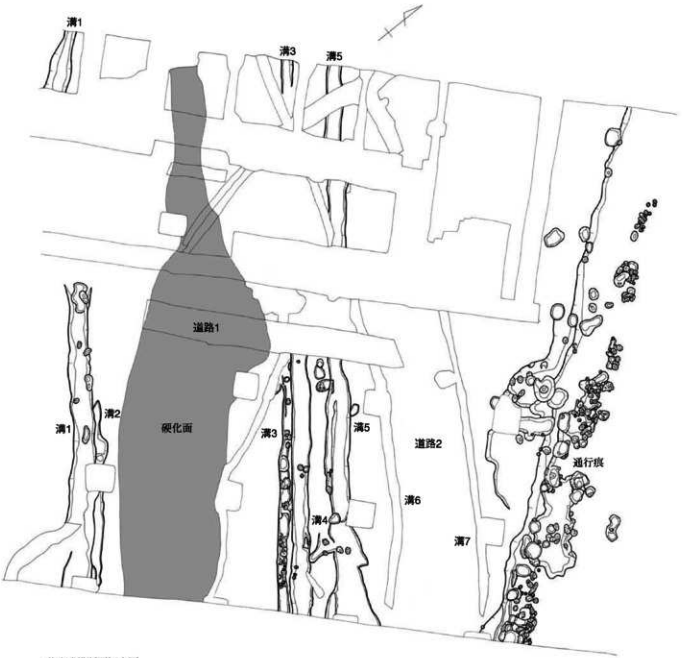
11号Ｂ溝（図版１－(1)・５－(2)、第４・６図）

埋土は上から灰黒色粘質土、黒色粘質土、暗灰色粘質土の順に堆積する。深さは41.5～56.5cmと北に向かって深くなる。

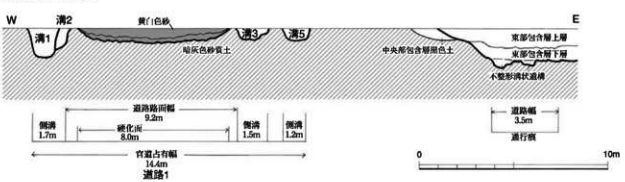
（２）道　路（図版１－(1)(2)・２－(1)(2)、第４・５・７図）

道路１

道路１は奈良時代から平安時代にかけて利用された道路で、当初は官道として造られたものと見られる。西側溝は始めに幅0.42～0.7m、深さ４～10.5cmの２号溝が掘削され、これを掘り広げるようなかたちで幅0.9～1.5m、深さ16.0～19.0cmの１号溝が掘削されている。１号溝は幾度かの掘り直しがあったのだろうが、最終的に平安時代初頭には埋没したものと見られる。東側溝は３～５号溝である。３号溝は幅0.4～0.55m、深さ４～８cm。４号溝は幅0.75～1.2m、深さ８～16cmを測る。３・４号溝は調査で新旧関係は確認できなかったが、溝底が凸凹しており、通行の痕跡である可能性がある。埋没時期は９世紀頃と見られる。東西の側溝間の距離は、最大となる１号溝と５号溝の間では12.5m、



道路遺構断面概念図



第７図　道路遺構実測図（1/200）

最小の2号溝と3号溝では9.2mを測る。側溝芯々幅ではそれぞれ13.5m、9.8mとなる。方位はN－51°－Wを示す。なお、1号溝－3号溝間の幅は9.7m、側溝芯々幅10.5mである。1号溝－4号溝が10.5m、溝芯々幅11.5m。2号溝－4号溝が10.0m、溝芯々幅10.8m。2号溝－5号溝が11.9m、溝芯々幅13.0mである。

道路面には黄白色砂と暗灰色砂質土が敷詰められ、特に中央の帯状に硬化した部分は、発掘作業に際して通常使用している移植鏝では全く歯が立たないほどであった。黄白色砂層の下には、これより広い範囲で暗灰色砂質土が敷かれており、これを除去すると無数の浅い小穴で凸凹した面が表れた。黄白色砂と灰色砂質土を踏み込んで形成されたものだが、調査時はこれが道路に関連するものとの認識が無かったため、図化していない。路面としては、帯状硬化が認められる黄白色砂上面とその下の灰色砂質土、灰色砂質土除去後に認められた凸凹面の3面以上があったものと思われる。道路の施工時期を側溝出土遺物の古相の須恵器に求めると7世紀後半頃となろう。また、11世紀後半から12世紀中頃の10号溝が路面に切り込む以前に、道路としては機能を失い通行が途絶えていたと見られる。

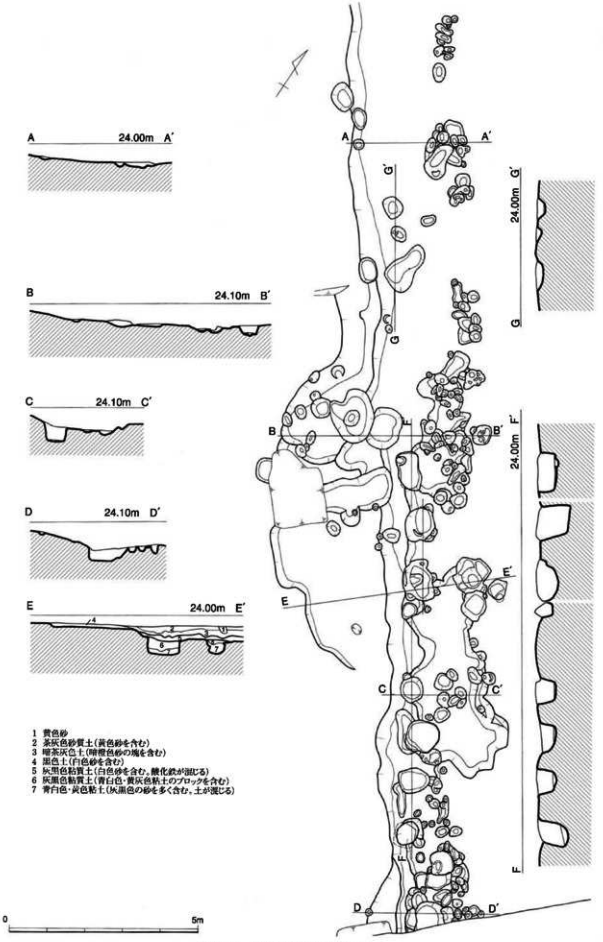
道路2

3.5～4.2mの一定幅を保って並行する6号溝と7号溝が、それぞれ西側溝と東側溝と考えられ、側溝芯々幅では4～4.7mを測る。調査区の中央部を横断する弧状に検出しており、この弧を直線に均した場合の方位は概ねN－65°－Wを示す。路面や路床として明らかな造作は認められなかったが、出土遺物から近世の道路遺構と考えられる。

（3）通行痕跡（図版1－(1)・3－(1)、第4・7・8図）

調査区は西から東に向かって高低差25cmの段落ちがあり、包含層（東部包含層上層・下層）が堆積していた。地形の段落ちは南北に約29.7mほど確認でき、この段落ちに沿って東部包含層除去後に南北に長さ約25m、幅約3mの範囲で不整形溝状・凸凹状遺構と連続土坑状ピット（ピット4・9～15を含む）が検出された。凸凹状遺構は、包含層掘下げ時には認識できなかったものの、土層観察で東部包含層内でも重層的に確認できることから、地山面だけでなく包含層堆積時においても継続的に遺構が形成されたと考えられる。連続土坑状ピットは幅0.5～1.0m、深さ0.5～0.8mのピットが地形の段落ちに沿って検出された。埋土は青白色・黄灰色粘土（地山）ブロックを含む灰黒色粘質土及び灰黒色砂を多く含む土が混じる青白色と黄色粘土である。

不整形溝状・凸凹状遺構・連続土坑状ピットは一定空間内に一定の方向性を持って遺構が展開していることや土層観察により継続的な空間利用が確認できることなどから、通行痕の可能性があると考えられる。東部包含層は奈良時代の遺物が大半を占めるが、包含層上層では10世紀から16世紀までの遺物が出土している。道路1の官道との切合い関係がないため、通行痕の成立時期は不明だが、重層的な遺構の展開や遺物から、長期にわたる通行があったものと想定される。



第8図　通行痕実測図（1/100）

（4）ピット（図版1－(1)、第4図）

調査区全体で遺物が出土したピットは16個あった。そのうち、大半は東部包含層除去後に段落ちの肩部分周辺に密集して検出された。これは通行痕跡に伴うピットで、ピット4・9～15が該当する。残りのピットは道路やその周辺に散見される程度の検出状況であった。

（5）包含層

包含層は調査区中央部と東部で検出した。調査区中央部包含層は黒色土で、調査区東部包含層上層に切られる位置関係にある。遺物は弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器椀と土師質土器鍋などが出土している。

調査区東部包含層は砂質土層の上層、粘質土層の下層に分層して調査を行った。出土遺物は上層で須恵器、土師器坏、下層では弥生土器壺、須恵器が認められるが、下層は奈良時代以降に、上層は10世紀以降に堆積したものと見られ、16世紀の遺物まで含んでいる。

3．遺　物

（1）土器・瓦

1号溝

土　器（第9図）

1～4は須恵器。1・2は壷の口縁部のみの小片で、丸味のある嘴状を呈す。3・4は底部のみの破片で、3は高台が内湾する形状を呈す。4は高台が八の字状に外反する形状を呈す。

瓦（図版6、第9図）

5・6は平瓦。5は端部ヘラケズリ調整、凸面は縄目タタキで、凹面は磨耗が著しいがタタラのイト切り痕が確認できる。色調は黒色で、焼成は良好で瓦質である。厚さ1.6～1.7cmを測る。6は四隅部分の小片が残存する。ヘラケズリによる端部調整が施され、凸面は縄目タタキ後一部ナデ消し痕が見られる。凹面は磨耗により調整不明である。色調は黒灰色で、焼成が良好で瓦質である。厚さ1.6～1.7cmを測る。

5号溝

土　器（図版6、第9図）

7～9は須恵器。7は底部のみの小片で、高台がやや外反する形状を呈す。8は壺の底部のみの小片である。底部はヘラ切り後ヘラ状工具および指ナデ調整を施す。9は壺の口縁部～肩部にかけての破片である。口縁部はくの字状を呈し、外面に格子状タタキ、内面に同心円状タタキを施す。

6号溝

土　器（第9図）

10は土師器。椀の高台部分のみの小片である。

瓦（図版６、第９図）

11は平瓦の小片で、厚さ1.3～1.5cmを測る。端部と凹面は磨耗が著しく調整不明で、凸面には老司系の正格子目タタキが残る。色調は淡黄灰色で、焼成はやや良好で土師質である。

７号溝

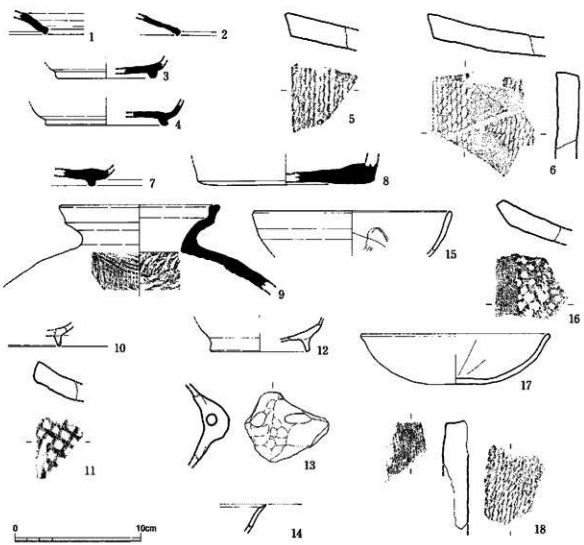
土　器（図版６、第９図）

12は土師器の椀で、底部1/6残存する。高台はやや外反し、高い形状を呈す。13は土師質土器の羽釜Ａ類である。耳部分のみの小片で、貼り付けに伴う指圧痕が残る。

８号溝

土　器（図版６、第９図）

14は白磁の椀Ⅸ類で、口縁部のみの小片。口縁部周辺の釉薬を掻き取る、いわゆる口禿げである。



第９図　溝出土土器実測図（1/3）

9号溝

土　器（図版6、第9図）

15は同安窯系青磁の椀Ⅰ－1ａ類で、口縁部はやや内湾し、内面にヘラ状工具による花文と細い櫛目文を有する。

瓦（図版6、第9図）

16は平瓦で端部のみの小片で、厚さ1.3～1.5cmを測る。ヘラケズリによる端部調整、凹面は磨耗しているが若干布目痕が確認でき、凸面は格子目の大きさが異なる特徴を有すタタキが残る。焼成はやや良好で瓦質である。

10号溝

土　器（図版6、第9図）

17は土師器の丸坏で、全体の1/2程度残存する。口径15.0cmに復元でき、内面に工具による押し出し痕が残る。

瓦（図版6、第9図）

18は丸瓦の破片で、厚さ2.05cmを測る。端部と凹面は磨耗のため調整不明で、凸面は縄目タタキが残る。色調は淡黄白色で、焼成がやや良好で土師質である。

道路面

土　器（図版7、第10図）

19～21は須恵器。19・20は坏で、底部のみの破片である。21は壺の小片で、体部下半から底部にかけてヘラケズリを施す。

道路面黄白色砂内

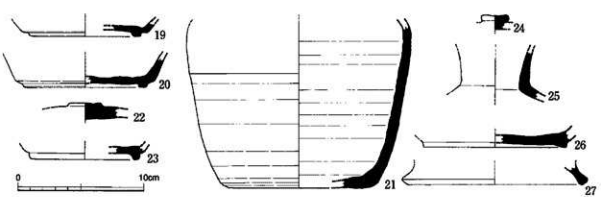
土　器（図版7、第10図）

22・23は須恵器。22はつまみ部分のみの小片で、扁平なボタン状を呈す。23は坏で、高台がやや内湾する形状を呈す。

道路面暗灰色砂質土内

土　器（図版7、第10図）

24～27は須恵器。24はつまみ部分のみの小片で、やや小型のボタン状を呈す。25は壺の頸部のみの



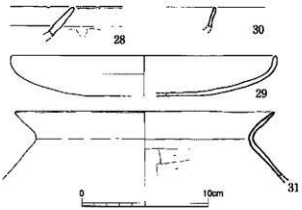
第10図　道路遺構出土土器実測図（1/3）

破片で、復元頸部径5.6cmを測る。26は底部のみの破片で、高台が外反する三角形状を呈す。27は脚部のみの小片である。

ピット4

土　器（図版6、第11図）

28は李朝雑釉陶器の段皿で、口縁部のみの小片である。口縁端部には輪花を有し、灰色の胎土にやや緑味かかった半透明釉がかかる。



第11図　ピット出土土器実測図（1/3）

ピット6

土　器（図版6、第11図）

29は土師器の皿で、全体の1/2残存する。口径20.3cm、器高3.2cmに復元でき、調整は磨耗のため不明である。

ピット8

土　器（第11図）

30は土師器の坏で、口縁部のみの小片である。口縁端部は内側に粘土を巻き込み、段を有する特徴を持つ。

ピット9

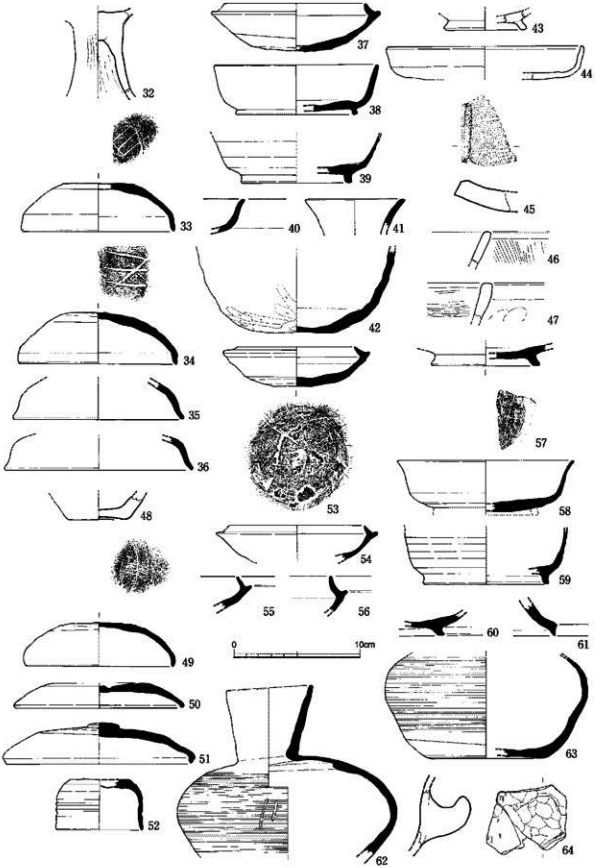
土　器（第11図）

31は古式土師器の甕である。口縁部～肩部にかけての小片で、外面は磨耗のため調整不明。内面は頸部下半にヨコ方向のナデとケズリ調整が施される。

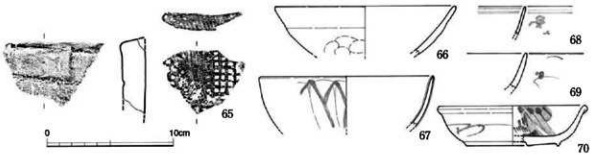
包含層上層

土　器（図版8、第12図）

32は弥生土器の高坏である。脚部のみの破片で、外面タテ方向のミガキ後に丹塗が施され、内面にはしぼり痕が残る。坏部分は磨耗のため調整不明。33～42は須恵器。33～36は壺。33・34はほぼ完形品で、天井部にヘラ記号があり、口縁部が直口する。35・36は口縁部のみの破片で、口縁部が外反する。37は坏身で、ほぼ完形品である。口縁11.1cm、受部径13.4cm、器高3.8cmを測る。38～40は坏である。38は全体の1/4残存し、口縁部が直口し、高台が低く、外反する形状を呈す。39は底部1/4程度の破片である。高台はやや外反する形状を呈す。40は口縁部のみの小片で、口縁端部は外反する。41は壺の口縁部のみの小片である。42は甕もしくは壺の底部のみの破片である。外面体部下半～底部にかけて回転ヘラケズリ後手持ちヘラケズリ調整を施す。43は黒色土器の椀である。内面が黒色で、調整は不明。高台は八の字に外反する形状を呈す。44は土師器の坏で、全体の1/4残存する。復元口径15.6cm、器高2.6cmを測る。口縁端部は内側に粘土を巻き込み、段を有する特徴を持つ。46・47は土師質土器の鉢で、口縁部のみの小片である。46は口縁端部から内面にかけて回転ナデで、外面はナナメ方向のハケ目調整である。47は外面は指圧痕により体部と口縁部の境がやや外反し、内面にヨコ方



第12図　包含層出土土器実測図（1/3）



第13図　包含層及び撹乱出土土器実測図（1/3）

向のハケ目調整を有するが、口縁端部調整で一部ナデ消される。

瓦（図版８、第12図）

45は平瓦の小片である。端部はヘラケズリにより面取りされ、凹面は細かな布目痕、凸面は丁寧なナデ消しが残る。須恵質で硬質。

包含層下層

土　器（図版８・９、第12図）

48は弥生土器の壺底部のみの破片で、底部6.5cmを測る。49～63は須恵器。49～51は蓋である。49は全体の1/2残存し、天井部にヘラ記号を有し、口縁部がやや内湾する。50は全体の1/2残存し、天井部ヘラ切り後未調整で、口縁端部は丸みを持つ短い嘴状を呈する。51は完形品。つまみ部径2.55cm、器高3.25cm、口径15.6cmを測る。つまみは中央が盛り上がる扁平な形状を有し、天井部ヘラケズリ調整で、口縁端部はやや内湾する嘴状を呈する。52は壺もしくは瓶の蓋と考えられる。全体の1/4残存し、天井部ヘラケズリで外面は回転ナデによる沈線状の段を有す。53～56は坏身である。57～60は坏である。61は高坏の脚部である。62は平瓶である。63は壺もしくは瓶の底部である。64は土師器で甕もしくは甑の把手の破片である。

瓦（図版９、第13図）

65は平瓦の小片である。端部に格子目タタキをナデ消した痕跡が残り、凹面に模骨痕、凸面は正格子目にばらつきのあるタタキを部分的にナデ消す調整を有す。須恵質で硬質。

撹　乱

土　器（図版９、第13図）

66は瓦器椀。口縁～体部下半1/6程度の小片である。内面に工具による押し出し痕跡と外面に指圧痕を有す。67は龍泉窯系青磁の椀Ⅱ－ｂ類で、口縁～体部上半にかけての小片である。口径13.9cmに復元できる。口縁部はやや内湾し、外面に鎬連弁文を有す。68は明代染付の丸椀で、口縁部のみの小片である。69・70は肥前系染付で、69はくらわんか椀で、70は皿である。69は口縁部が内湾し、外面に淡い藍色釉で彩色される。70は口縁部分を折込み、玉縁状を呈す。内面見込み部分には目跡が確認でき、底部畳付部分は凹形にケズリ出し、蛇の目状に釉剥ぎしている。外面は松葉文、内面は山水文を明るいベロ藍の釉で彩色。

表１　１次調査出土土器観察表

法量の（数値）は復元値

挿図番号	図版番号	器別	器種	出土位置	法量(cm) ①口径②器高③底径④胴部最大径	残存状態	調整及び特徴
9－1		須恵器	壺	1号溝	－	口縁部のみ	調整は内外共回転ナデ、天井部ヘラ切り。 胎：は微細な砂粒混ぜわずかに含み緻、焼成は良好。 色調は内外黒にも灰黒色。
9－2		須恵器	壺	1号溝	－	口縁部のみ	調整は内外回転ナデ、内周凸凹ホソ立方向ナデ。 胎：は砂粒も、焼成は良好。 色調は内外黒にも灰褐色。
9－3		須恵器	坏	1号溝	③（7.6）	底部1/8	調整は内外回転ナデ、内周回転ナデ指圧ナデ、底部へラ切り後高台貼付け(付に伴うナデ)、胎：は微細な砂粒を含む緻密。 焼成は良好。色調は内外黒にも黒灰色。
9－4		須恵器	坏	1号溝	③（10.1）	底部1/8	調整は内外回転ナデ、内面回転ナデ指圧ナデ、底部高台貼付け(付に伴う)回転ナデ、胎：は微細な砂粒を含む中含み緻密。 焼成は良好。色調は内外黒にも黒灰色。
9－7	図版6	須恵器	坏	5号溝	－	底部小片	調整は内外回転ナデ、内面回転ナデ指圧ヨコ方向ナデ、 底部へラ切り後高台貼付け(付に伴う)回転ナデ、胎：は細砂粒多く含み緻密。 焼成は良好。色調は内外黒にも黒灰色。
9－8	図版6	須恵器	壺	5号溝	③（14.0）	底部1/4	調整は内外回転ナデ、内面回転ナデ指圧ヨコ方向ナデ、底部へラ切り後ナデ、底部へラ切り後ヨコ方向ヘラ状工具及び指ナデ、胎：は細砂粒を含む中含み緻。 焼成は良好。色調は内外黒にも灰黒色。
9－9	図版6	須恵器	壺	5号溝	①（12.8）	口縁部～肩部1/7	調整は内外回転ナデ、頸部ナデ指圧ナデ、内面回転ナデ横方向ヘラ状ナデ、胎：は細砂粒を含む中含み緻密。 焼成は良好。色調は内外黒にも黒灰色。
9－10		土師器	椀	6号溝	－	底部小片	調整は内外共回転ナデ。 胎：は微細な砂粒を含む中含み緻密。焼成は良好。 色調は内外赤にも茶褐色。
9－12	図版6	土師器	椀	7号溝	③（7.8）	底部1/6	調整は内外回転ナデ。 胎：は微細な砂粒を少々含むやや緻密。焼成は良好。 色調は内外赤にも黒に近い。
9－13	図版6	土師器十器	羽釜	7号溝	－	耳部のみ	調整は内外回転ナデ。 胎：は砂粒が多く、雲母、角礫を含む内面にも含みやや緻。 焼成は良好。色調は内外黒にも褐黒色。内面輪状色。
9－14	図版6	白磁	椀Ⅰ類	8号溝	－	口縁部のみ	調整は内外回転ナデ、素地は微細な白色、胎土ガラス。淡灰に白色でやや緻、輪郭に不連続で波状のヘラ状色線。 焼成は良好。
9－15	図版6	灯明具系青磁	椀Ⅰ－1ａ類	9号溝	①（15.8）	口縁部1/12	素地は微細な白色、胎土ガラス。淡灰に白色でやや緻。 釉は微細な黒色、気泡が大気泡を含みやや緻。淡灰色。 口縁は波状の凹凸を施し、胎土は微細な砂粒を含む中含む緻。素人が入る。焼成は良好。
9－17	図版6	土師器	丸坏	10号溝	①（15.0）　②4.0	全体の1/2	調整は内外回転ナデ、内面に黒ニスによるスナップ、底部へラ切り後ホナデ。胎：は細砂粒を少々含むやや緻。 焼成は良好。色調は内外黒にも淡黒褐色。
10－19	図版7	須恵器	坏	道路面	③（8.8）	底部1/6	調整は内外回転ナデ、底部回転ヘラ切り後高台貼付け(付に伴う)回転ナデ。 胎：は微細な砂粒を少々含む、緻。焼成は良好。 色調は内外黒にも黒灰色。
10－20	図版7	須恵器	坏	道路面	③（9.8）	底部1/5	調整は内外回転ナデ、底部へラ切り後高台貼付け(付に伴う)回転ナデ。 胎：は微細な砂粒ややすくわずかに含み、緻。焼成は良好。 色調は内外黒にも黒灰色。
10－21	図版7	須恵器	壺？	道路面	③（11.0）	胴部～底部1/5	調整は内面胴部回転ナデ、外部下半回転ヘラ ケズリ、内面回転ナデ。 胎：は微細な砂粒ややすくわずかに含み、緻。焼成は良好。 色調は内外黒にも黒色。
10－22	図版7	須恵器	蓋つまみ	道路面黄白色砂	つまみ径2.8	つまみ1/2	調整は内外回転ナデ、内面回転ナデ。 胎：は微細な砂粒と金雲母を含み緻。焼成は良好。 色調は内外黒灰色、内面は白。
10－23	図版7	須恵器	坏	道路面黄白色砂	③（8.4）	底部1/10	調整は内外回転ナデ、底部へラ切り後高台貼付け(付に伴う)回転ナデ。 胎：は微細な金雲母。 焼成は良好。色調は外黒灰色、内面黒灰色。
10－24	図版7	須恵器	蓋つまみ	道路面暗灰色砂質土	つまみ径2.2	つまみのみ	調整は内外回転ナデ、内面回転ナデ。 胎：は微細な砂粒と金雲母を多く含み緻。 焼成は良好。色調は内外黒にも灰白色。
10－25	図版7	須恵器	壺	道路面暗灰色砂質土	頸部径（5.6）	頸部1/3	調整は内外共回転ナデ。 胎：は微細な砂粒と金雲母を多く含みやや緻。焼成は良好。 色調は外黒・断面灰白色、内面黒灰色。
10－26	図版7	須恵器	坏	道路面暗灰色砂質土	③（11.3）	底部1/6	調整は内外回転ナデ、底部へラ切り後高台貼付け(付に伴う)回転ナデ。 胎：は微細な砂粒と金雲母を含みやや緻。焼成は良好。 色調は外黒褐灰色、内面黒灰色。
10－27	図版7	須恵器	脚部	道路面暗灰色砂質土	③（14.7）	底部小片	調整は内外共ヨコ回転ナデ。 胎：は砂粒を含み緻。 焼成は良好。色調は外黒褐灰色、内面灰色。
11－28	図版6	手捏土器鍋陶器	段皿	ピット４	－	口縁部小片	調整は内外回転ナデ、口縁部端部ヨコ方向ナデ。胎：は微細な白色砂粒と金雲母を含む緻密。 焼成は良好。色調は内外黒灰色、内面黒灰色で中央部に黒褐色。
11－29	図版6	土師器	皿	ピット６	①（20.3）　②（3.2）	全体の1/2	成形は不明。 胎：は微細な砂粒と金雲母を多く含みやや緻。 焼成は良好。色調は内外赤にも茶黒色。底部に黒斑。
11－30		土師器	坏	ピット８	－	口縁部小片	調整は内外回転ナデ。 胎：は微細な砂粒と金雲母をわずかに含み緻密。 焼成は良好。色調は内面は赤黒褐色、外面は赤黒色。
11－31		古式土師器	甕	ピット９	①（20.5）	口縁部～肩部小片	調整は外部ヨコ方向ナデ、内面ヨコ方向ナデ。口縁部ヨコナデ。 胎：は砂粒と雲母を含む中含む緻。焼成は良好。 色調は外赤褐色、内面黒灰褐色。断面黒色。
12－32	図版8	弥生土器	高坏	調査区中央部包含層黒色土	－	脚部のみ	調整は外面ミガキ、内面ヨコ削。 胎：は微細な砂粒と金雲母を含む中緻。 焼成は良好。やや軟。色調は外黒褐灰色に赤褐、内面黒黒灰色。
12－33	図版8	須恵器	壺	調査区東部包含層上層	①12.2　②3.8	はほ完形	調整は外回転ナデ、天井部へラ切り後ハケナデ&へラ切り、内面回転ナデ&ヘラ切り、底部回転ナデ。胎：は微細な砂粒を含む中緻。焼成は良好。色調は外黒灰色、一部赤色。内面黒褐灰色。断面灰色。
12－34	図版8	須恵器	壺	調査区東部包含層上層	①12.3　②4.0	はほ完形	調整は外回転ナデ、天井部回転ヘラナデ&ヘラ切り、内面回転ナデ&ヘラ切り、底部回転ナデ。胎：は微細な砂粒を含む中緻。 焼成は不良。色調は外黒灰色、内面淡黒褐灰色。
12－35	図版8	須恵器	壺	調査区東部包含層上層	①（13.2）	口縁部1/3	調整は内外回転ナデ。 胎：は微細な砂粒を含む緻。 焼成は良好。色調は外黒褐灰色、内面灰褐色。
12－36		須恵器	壺	調査区東部包含層上層	①（14.9）	口縁部1/6	調整は外回転ナデ。 胎：は微細な砂粒をやや多く含む緻。 焼成は良好。色調は外黒褐灰色、内面灰黒色。
12－37	図版8	須恵器	坏身	調査区東部包含層上層	①11.1・受部径13.4②3.8	はほ完形	調整は外面回転ナデ、内面回転ナデ指圧ナデ、底部回転ヘラケズリ、胎：は微細な砂粒をわずかに含み緻密。焼成は良好。 色調は外黒にも黒白色。

挿図番号	図版番号	器別	器種	出土位置	法量(cm) ①口径②器高③底径④胴部最大径	残存状態	調整及び特徴
12－38	図版8	須恵器	坏	包含層	①（12.8）　②（4.0） ③（9.7）	全体の1/4	調整は外面ヘラ削り後ナデ、内面回転ナデ後石ふき部分ナデ、底部ヘラ切り後高台貼り付けて作り成形ナデ、胎土は細砂粒をやや少く含み精良。色調は良好、色調は内外面とも青灰色。
12－39	図版8	須恵器	坏	調査区中央部包含層黒色土	③（8.8）	底部1/4	調整は内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後高台貼り付けて作り成形ナデ、胎土は細砂粒をやや少く含み精良。色調は良好、色調は内外面とも青灰色。
12－40		須恵器	坏	調査区東部包含層上層	－	口縁部のみ	調整は内外面回転ナデ。胎土は砂粒をやや多く含み粗。色調は良好、色調は外面明色、内面灰色。
12－41		須恵器	壺	調査区東部包含層上層	①（7.9）	口縁部のみ	調整は内外面回転ナデ。胎土は細砂粒をやや多く含み粗。色調は良好、色調は内外面とも灰色。
12－42	図版8	須恵器	甕×壺	調査区東部包含層上層	－	底部のみ	調整は外面平行タタキ、内面ナデ後石ふき部分ナデ、底部は高台貼り付けて作り成形ナデ、胎土は細砂粒をやや多く含み精良。色調は良好、色調は外面黄灰色、内面黄色。
12－43		黒色土器	椀	調査区中央部包含層黒色土	③（6.5）	底部1/6	調整は外面回転ナデ、内面不明、底部高台貼り付けて作り成形ナデ、胎土は微細砂粒を含むやや粗。色調は良好、色調は内面黒色、外面灰色。
12－44	図版8	土師器	坏	調査区東部包含層下層	①（15.6）　②（2.6）	全体の1/4	調整は外面回転ナデ、内面回転ナデ後石ふき部分平底方向ナデ、胎土は微細砂粒を金雲母を含みやや粗。色調は良好、色調は内面橙色、外面赤橙色。
12－46		土師質土器	鍋	調査区中央部包含層黒色土	－	口縁部のみ	調整は外面ナデ、内面ハケナデ。胎土は細砂粒を多く含みやや粗。色調は良好、色調は内外面とも暗橙色。
12－47		土師質土器	鍋	調査区中央部包含層黒色土	－	口縁部のみ	調整は内面横ナデ後指圧痕、内面横ナデ後ハケ目ナデ後ハケ目ナデ。胎土は細砂粒を金雲母を多く含みやや粗。色調は良好、色調は外面赤色、内面灰色、部分的黒斑あり。
12－48	図版8	弥生土器	甕	調査区東部包含層下層	③6.5	底部のみ	調整は不明。胎土は砂粒をやや多く含み粗。色調は良好、色調は内外面とも橙色。
12－49	図版8	須恵器	蓋	調査区東部包含層下層	①（11.5）　②（3.4）	全体の1/2	調整は天井部頂部ヘラケズリ後ヘラ削り、天井部側ナデ、内面回転ナデ、内面頂部ヘラ状ロナデ。胎土は砂粒をやや多く含みやや粗。色調は良好、色調は内外面とも青灰色。
12－50	図版8	須恵器	蓋	調査区東部包含層下層	①（13.7）　②（1.95）	全体の1/2	調整は天井部ヘラ削り後ヘラ削り、内面回転ナデ、内面頂部ナデ後見込み部分平底方向ナデ。胎土は砂粒が微少胎土やヒ含みやや粗。色調は中心部、やや暗灰、色調は内面灰白色、内面頂部色一白色。
12－51	図版8	須恵器	蓋	調査区東部包含層下層	①15.6　②3.25 つまみ部径2.55	完形	調整は天井部ヘラケズリ、内面回転ナデ、内面頂部ナデ後ロナデ、胎土は細砂粒をやや多く含みやや粗。色調は良好、色調は内外面とも暗灰色。
12－52	図版8	須恵器	蓋	調査区東部包含層下層	①（6.7）　②（4.0） 天井部径（4.7）	口縁部1/4	調整は内外面回転ナデ、天井部頂部ヘラケズリ。胎土は砂粒がやや多く含み粗。色調は良好、色調は内外面とも暗青灰色。
12－53	図版8	須恵器	坏身	調査区東部包含層下層	①9.2・受部径11.6　②3.1	ほぼ完形	調整は口縁部回転ナデ、内面見込み部ロナデ、底部ヘラ切り後無調整ヘラ削り。胎土は砂粒をやや多く含みやや粗。色調はやや良好、やや暗黒、色調は内外面灰白色、内面灰褐色一部褐色。
12－54	図版8	須恵器	坏身	調査区東部包含層下層	①（10.7）・受部径（12.6）	1/4	調整は内外面回転ナデ。胎土は砂粒をやや多く含み粗。色調は良好、色調は外面明灰色、内面灰色。
12－55	図版8	須恵器	坏身	調査区東部包含層下層	－	口縁部のみ	調整は内外面回転ナデ。胎土は砂粒をやや多く含み粗。色調は良好、色調は内外面とも灰色。
12－56	図版8	須恵器	坏身	調査区東部包含層下層	－	口縁部1/6	調整は内外面回転ナデ。胎土は砂粒をやや多く含み粗。色調は良好、色調は内外面とも灰色。
12－57	図版9	須恵器	坏	調査区東部包含層下層	③（8.6）	底部1/4	調整は内外面回転ナデ、底部ヘラ切り後高台貼り付け作り成形ナデ後ヘラ削り。胎土は砂粒を微細金雲母を含むやや粗。色調は良好、色調は内面明灰色、内面灰色。
12－58		須恵器	坏	調査区東部包含層下層	①（14.0）	全体の1/3	調整は外面回転ナデ、内面回転ナデ後見込み部ロナデ、底部ヘラ切り後ナデ後無調整。胎土は砂粒が微少胎土やヒ含み。色調は良好、色調は内外面とも灰色。
12－59		須恵器	坏	調査区東部包含層下層	③（10.0）	底部1/4	調整は外面回転ナデ、内面回転ナデ後見込み部分平底方向ナデ、底部高台貼り付け作り成形ナデ。胎土は砂粒をやや多く含み粗。色調は良好、色調は内外面とも暗青灰色。
12－60		須恵器	坏	調査区東部包含層下層	－	底部小片	調整は内外面回転ナデ、内面回転ナデ後見込み部分平底方向ナデ、底部高台貼り付け作り成形ナデ。胎土は砂粒を金雲母を含みやや粗。色調は良好、色調は内外面とも暗灰色。
12－61		須恵器	高坏	調査区東部包含層下層	－	脚部のみ	調整は内外面とも回転ナデ。胎土は精良。色調は良好、色調は内外面とも暗青灰色。
12－62	図版9	須恵器	平瓶	調査区東部包含層下層	①（6.9）　④（17.3）	口縁部～胴部1/4	調整は口縁部回転ナデ、胴部ヨコ目ヘラ記号、内面回転ナデ後指圧痕。胎土は砂粒をやや多く含みやや粗。色調は良好、色調は内外面とも暗灰色。
12－63	図版9	須恵器	壺×瓶	調査区東部包含層下層	③（9.4）　④（16.0）	胴部～底部1/5	調整は外面胴部ヘラ削り後ナデ、内面回転ナデ、底部胎土ヘラケズリ後ナデ。胎土は砂粒をやや多く含み粗。色調は良好、色調は内外面とも灰色。
12－64	図版9	土師器	把手	調査区東部包含層下層	－	把手のみ	調整は外面ハケ目後指圧痕、内面ハケ目ナデ後指圧痕。胎土は砂粒が微少胎土やヒ含み粗。色調は良好、色調は内外面とも暗橙色。内面黒斑あり。
13－66	図版9	瓦器	椀	撹乱	①（14.3）	1/8胴部～体部1/10	調整は外面ハケ目ナデ後下半部指圧痕、内面工具によるロナデ、胎土は微細砂粒を含みやや粗。色調は良好、色調は内外面とも灰色～黒灰色。部分的黒斑あり。
13－67	図版9	瓦器系黒色土器	椀	撹乱	①（13.9）	口縁部小片	調整は外面横ナデ後指圧痕、内面横ナデ、底部は指圧痕。胎土は砂粒を金雲母を含みやや粗。色調は良好、色調は内外面とも暗灰色。
13－68	図版9	明染	丸椀	撹乱	－	口縁部小片	調整は内外面横ナデ、底部は指圧痕。胎土は砂粒を金雲母を含むやや粗。色調は良好、色調は内外面とも暗灰色。
13－69	図版9	肥前系染付	くらわんか椀	撹乱	－	口縁部小片	調整は内外面回転ナデ。底部は細砂粒を含むやや粗。胎土は砂粒を含みやや粗。色調は良好、色調は外面白色で、内面は白色で、部分的にやや灰白色。胎土は白土やや粗。色調は良好。
13－70	図版9	肥前系染付	椀	撹乱	①（12.8）　②3.4 ③（7.8）	全体の1/4	調整は内外面回転ナデ。胎土は砂粒を含みやや粗。色調は外面白色で、内面は白土やや灰白色。胎土は白土やや粗。色調は良好。

第14図
小玉実測図
(1/1)

第15図　石器実測図（1/2）

（2）小　玉（図版9、第14図）

71はタテ3.5mm、ヨコ3.5mm、厚さ2.5mmを測る完形品である。素材は細かな気泡を含むガラス質で、透明なコバルトブルーである。道路面黄白色砂内から出土した。

（3）石　器（図版9、第15図）

72はサヌカイト製の打製石鏃である。ほぼ完形品で、タテ2.85cm、ヨコ2.25cm、厚さ0.6cmを測る。基部は平基式で、片面は剥離後未調整のままである。道路面から出土した。73は用途不明石製品で、暗灰色～黄灰白色の滑石製である。欠損部以外の面に細かな筋状の使用痕が見られ、砥石の可能性がある。ヨコ6.1cm、厚さ1.6cmを測り、扁平な形状を呈す。9号溝から出土した。

4．小　結

今回の調査では、官道とこれに伴う側溝及び通行痕、中世の溝、江戸時代の道路と側溝、自然流路を検出した。

この中でも特筆すべき点は官道の検出である。奈良～平安時代にかけて使用されていたこの道路遺構は、律令期に官道として両側に側溝を設えた道路幅約12.5mの大道を整備したものである。官道としての機能が失われた後も、この規格を利用して通行が続いていたようだが、路面に中世の溝が切り込んでいることから、11世紀代にはほとんど通行が途絶えていたものと見られる。西側の側溝に比べて東側溝はやや早い段階で埋没したようである。

通行痕は官道の約12m東側を踏み込んで形成されている。成立時期が明確でないため、官道との関係は不明だが、本来、低湿な地形である当地において包含層が堆積する過程で継続的に遺構が形成されたものと見られ、奈良時代の遺物や10世紀から16世紀にかけての遺物が含まれている。

この後、近世に道路が作られるが、当地では道路関連の遺構以外に顕著な遺構が認められない。基本的に当地一帯は、古代から近世に至るまで荒蕪地であったと推察され、原野に走る一本道といった景観が思い描かれる。

Ⅳ　2次調査の内容

1．調査の概要

先ノ原遺跡2次調査は、1次調査地点から約15m南東側に新設される航空自衛隊春日基地音楽隊訓練場建設予定地902㎡を対象として、平成3年10月19日から同年12月24日にかけて発掘調査を実施した。1次調査地点と近接した位置にあり、遺構の検出状況も1次調査と同様、基地の整地や既存建物の基礎による撹乱が著しかった。調査はまず、対象地全体に分厚く貼られたコンクリート舗装及び、調査区の西側2/3ほどの範囲にかけて残存していた中・近世の遺物を包含する茶灰色土層（包含層上層）までを大型重機を用いて除去した。この直下、地表面から約50cmの深さで1・2号溝など中世の遺構を検出した。この遺構面の標高は24.4mである。調査区の東半部は地形が徐々に低くなり、茶灰色土層の下にある灰色砂層（包含層中層）、黒色粘質土層（包含層下層）を除去すると、標高24.0mの地山面において、奈良時代の官道に関連する遺構と見られる7～9号溝などが表れた。

調査で検出した遺構は、溝14条、ピット、道路、通行痕が認められる。

出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、瓦、石器などである。

2．遺　構

調査で確認できた重複する遺構の新旧関係は、次に示したとおりである。

4～6号溝→2号溝←3号溝

4号溝→5号溝

7号溝←8号溝

（1）溝

1号溝（図版10－(1)(2)・11－(1)(2)・13－(1)、第16・17図）

調査区中央に位置し、長さ15.5mを検出した。幅0.35～0.65m、深さ8.0cmを測る。西側に並行する2号溝がある。埋土は黄灰色～茶灰色～茶褐色の砂層及び砂質土が堆積する。

出土遺物は須恵器、土師器があり、11世紀後半～12世紀前半埋没の道路東側溝と考えられる。

2号溝（図版10－(1)(2)・11－(1)(2)・13－(2)、第16・17図）

調査区西側に位置し、長さ約13.0mを検出し、西側に緩やかに湾曲する形状を呈する。2号溝が3～6号溝を切る位置関係である。東側に1号溝が並行している。幅0.85～1.5m、深さ10～25cmを測る。埋土は暗灰色～黒色～灰白色の砂質土と粘質土の互層堆積である。遺物の取り上げは上・中・下層に分けて行っている。第17図の土層実測図Eでは層序が逆転しているが、4層は中層、5層が下層であ

る。

出土遺物は須恵器、土師器、黒色土器、石鏃で、１号溝と対を成す12世紀後半以降埋没の道路西側溝と考えられる。

３号溝（図版10－(1)(2)、第16・17図）

調査区西側に位置し、長さ4.5mを検出した。２号溝に切られる。幅0.8～1.2m、深さ13～18.5cmを測る。埋土は下から暗灰褐色砂質土、茶黒色土、黄褐色砂の順に堆積する。

出土遺物はない。

４号溝（図版10－(1)(2)・11－(1)(2)・13－(3)、第16・18図）

調査区西側に位置し、長さ約10mを検出した。２号溝に切られる。幅0.55～1.0m、溝の深さは９cmで２号溝に向かって深くなる。５・６号溝とともに奈良時代埋没の官道西側溝のひとつと考えられ、５号溝に切られる。

出土遺物は須恵器、土師器、平瓦である。

５号溝（図版10－(1)(2)・11－(1)(2)、第16・18図）

調査区西側に位置し、長さ8.0mを検出した。２号溝に切られる。東側に並行する４号溝を切るが、西側に並行する６号溝との切り合いは不明である。幅は0.4～1.0m、深さ４～12cmを測る。奈良時代埋没の官道西側溝のひとつ。

出土遺物は須恵器のみである。

６号溝（図版10－(1)・14－(1)、第16・18図）

調査区西側に位置し、長さ6.5mを検出した。２号溝に切られる。東側に５号溝が並行する。幅0.5～1.2m、深さ4.5～8.0cmを測る。奈良時代埋没の官道西側溝のひとつ。

出土遺物は須恵器、平瓦である。

７号溝（図版10－(1)(2)・14－(2)、第16・18～20図）

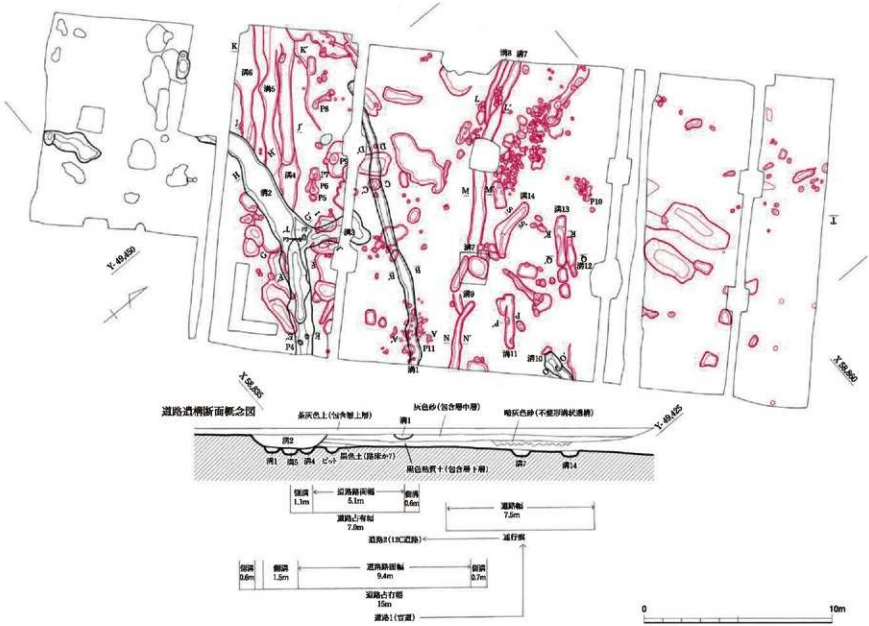
調査区中央に位置し、長さ約10mを検出した。８号溝を切る位置関係にあり、南側で検出した９号溝は同一遺構と考えられる。幅0.7m、深さ８cmを測る。出土遺物がなく、時期は特定できなかったが、官道西側溝の４～６号溝と一定幅を保って並行することから、官道東側溝の可能性がある。

８号溝（図版10－(1)(2)、第16・18・20図）

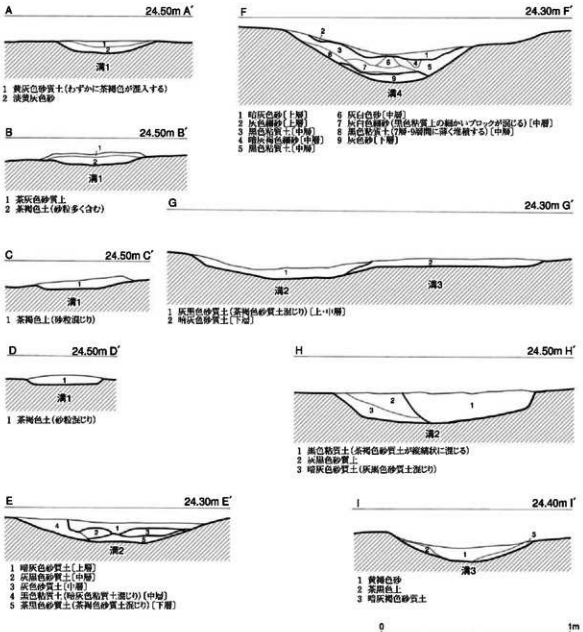
調査区中央に位置し、長さ3.0mを検出した。並行する７号溝に切られている。幅0.3m、深さ４～７cmを測る。埋土は黄灰色砂質土が混じる茶灰色砂単層である。出土遺物がなく時期は特定できなかったが、７号溝同様、官道東側溝の可能性がある。

９号溝（図版10－(1)(2)、第16・18・20図）

調査区中央に位置し、長さ3.7mを検出した。やや蛇行した形状を呈し、幅0.3～0.5m、深さ8.0cmを測る。埋土は灰褐色砂質土単層である。出土遺物はなく、時期は特定できない。７号溝は位置関係から同一遺構と考えられることから、官道東側溝であろう。



第16図　２次調査遺構配置図（1/200）



第17図　土層実測図①（1/20）

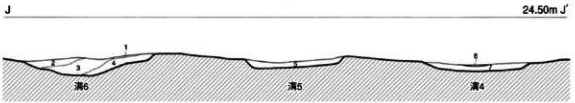
10号溝（第16・20図）

調査区東側に位置し、長さ約1.8mを検出した。幅0.6m、深さ8㎝程度を測る。埋土は暗茶褐色粘質土である。

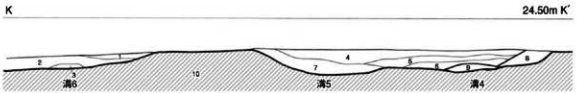
出土遺物は須恵器片、土師器である。

11号溝（図版14－(3)、第16・20図）

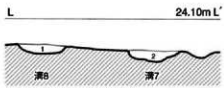
調査区東側に位置し、長さ2.85mを検出した。幅0.4m、深さ4～7.5mを測る。埋土は灰色土が混じる黒色土単層である。出土遺物がなく時期は特定できなかった。通行による帯状硬化部分の可能性がある。



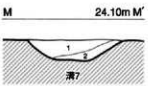
1 赤黒色粘質土〔溝6〕
2 暗茶灰色砂質土〔溝6〕
3 黄褐色砂〔溝6〕
4 暗灰色砂質土〔溝6〕
5 赤灰色砂〔溝5〕
6 暗灰色細砂〔溝4〕
7 茶灰色砂〔溝4〕



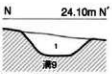
1 赤黒色砂質土〔溝6〕
2 暗灰色砂粘質土〔溝6〕
3 灰黒色砂質土〔溝6〕
4 茶黒色砂質土〔溝5〕
5 暗灰色細砂〔溝5〕
6 黄褐色砂〔溝5〕
7 灰黒色砂質土〔溝5〕
8 灰色シルト〔溝4〕
9 灰黒色シルト〔溝4〕
10 灰褐色砂質土〔地山〕



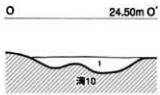
1 茶灰色砂（黄灰色砂質土混じり）
2 上方明るい



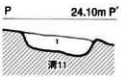
1 茶灰色砂質土
2 黄灰色砂質土



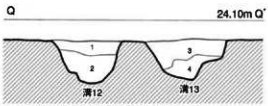
1 灰褐色砂質土



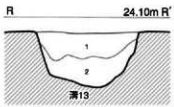
1 暗茶褐色粘質土



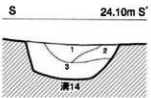
1 灰白土混入黒色土



1 黒色粘質土（横筋状に細粒の白色砂をわずかに含む）
2 灰褐色砂・暗黄褐色土・黒色粘質土混在
3 1に同じ
4 黒色粘質土・黄白色砂・暗灰色砂混在

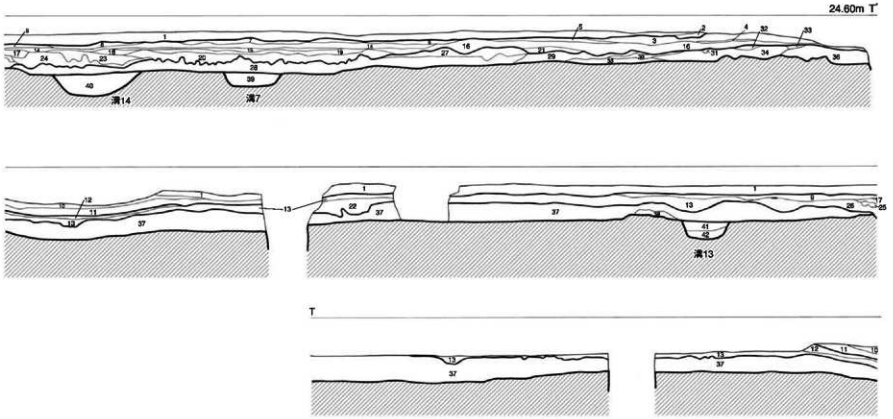


1 黒色粘質土（横筋状に細粒の白色砂をわずかに含む）
2 黒色粘質土・黄白色砂・暗黄色砂混在



1 灰黒色土
2 暗灰褐色砂質土
3 暗黄灰色砂質土

第18図　土層実測図②（1/20）



1 灰色土(やや粘質・砂粒を多く含む)
2 茶灰色土(砂粒混じり)(溝1)
3 灰色砂
4 明灰色砂
5 黄白色砂
6 灰黄色砂
7 淡赤灰色砂
8 明灰色砂
9 灰黄色砂
10 に赤い黄灰色土
11 灰色土(やや粘質)
12 茶灰色土(砂粒多く含む)
13 淡灰褐色砂質土(暗灰色粘質土を含む)
14 灰色砂
15 灰白色砂
16 淡灰黄色砂(粗砂)
17 灰白色砂
18 茶灰色砂・灰黑色砂・暗灰色細砂混在
19 灰黄色砂(粗砂)
20 暗灰色砂(粗砂・
ト部の凸凹部分は鉄錆色の暗黄色砂)
21 暗黄色砂
22 灰褐色砂(粗砂・暗黄色砂・黄白色砂を含む)
23 暗灰黄色砂(下部ほど砂粒が粗い)
24 黑色粘質土(粗砂を多く含む)
25 暗灰色砂
26 明茶灰色砂(黑色粘質土を含む)
27 黑色粘質土(明灰色砂をブロック状に含む)
28 灰黑色粘質土
29 黑色砂質土(粗砂を極めて多く含む粘質土)
30 暗黄灰色砂(粗砂)
31 21と同じ
32 茶黑色砂質土(29より砂粒細かい)
33 灰色砂質土
34 29と同じ
35 茶灰色粘質土
36 黑色粘質土・灰色粘質土・灰黄色砂が層状に混在
37 灰黑色粘質土
38 灰色砂
39 茶灰色砂質土(溝7)
40 暗黄灰色砂質土(溝14)
41 黑色粘質土(溝13)
42 黑色粘質土・黄白色砂・暗灰色砂混在(溝13)

0 2m

第19図　土層実測図③（1/40）

12号溝（図版10－(1)・15－(1)、第16・18・20図）

調査区東側に位置し、長さ2.13mを検出した。13号溝に並行する位置関係にあり、幅0.5mを測る。深さ12.5～21.0cmで、南に向かって段状に深くなる。埋土は下から灰褐色砂・暗黄褐色土・黒色粘質土混在土、黒色粘質土の順に堆積する。通行による帯状硬化部分の可能性がある。出土遺物がなく、時期は特定できなかった。

13号溝（図版10－(1)(2)・15－(2)(3)、第16・18～20図）

調査区東側に位置し、長さ2.67mを検出した。12号溝に並行する位置関係にあり、幅0.5mを測る。深さ19.5～24.0cmで、溝中央部分が深い。埋土は下から黒色粘質土・黄白色砂・暗黄色砂混在土、黒色粘質土の順で堆積する。溝の南側に深さ8.0cmほどのピットが連続していることなどから、通行による帯状硬化部分の可能性がある。

出土遺物は瓦のみである。

14号溝（図版10－(1)(2)、第16・18～20図）

調査区東側に位置し、長さ3.3mを検出した。くの字状に屈曲した形状を呈し、幅0.5～0.8m、深さ23.0cmを測る。埋土は下から暗黄灰色砂質土、暗灰褐色砂質土、灰黒色土の順に堆積する。出土遺物はなく、時期は特定できない。11～13号溝同様、通行に伴う帯状硬化部分と考えられる。

（2）道　路（図版10－(1)(2)・11－(1)(2)、第16～20図）

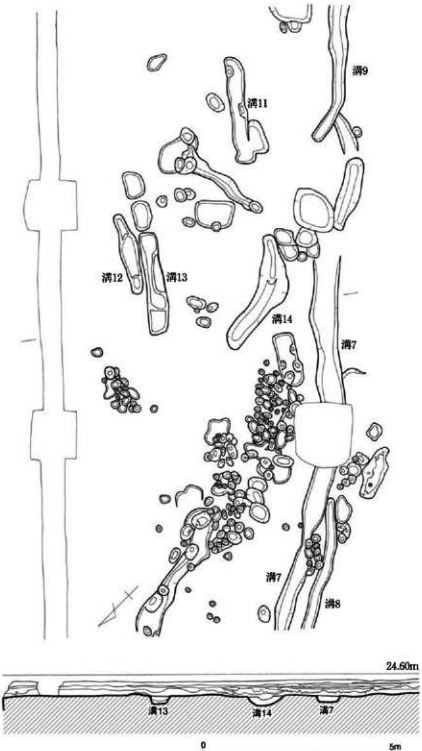
道路1

道路1は包含層下層の黒色粘質土層を除去後に検出した。奈良時代の官道と考えられる。並行する4～6号溝が西側溝で奈良時代に埋没したものと見られる。これからやや間を開けて東側に検出した7～9号溝が東側溝で、出土遺物に乏しいが、遺構を覆う黒色粘質土（包含層下層）の状況から遅くとも平安時代初頭には埋没したものと見られる。4・5号溝は一部重複した部分があるが、切り合いは不明である。7号溝は8号溝を切っている。各側溝の規模は、4号溝が幅約0.7m、深さ約9cmを測り、長さは10mを検出した。5号溝は幅約0.7m、深さ4～12cm、長さ8m。6号溝は幅約0.8m、深さ4.5～8cm、長さ6.5m。7号溝は幅約0.7m、深さ8cm、長さ10m。8号溝は幅約0.3m、深さ4～7cm、長さ3m。9号溝は幅約0.45m、深さ8cm、長さ3.7mで、西側溝に比べると東側溝は貧弱である。道路幅は、最大となる6号溝－7号溝間では12.5m前後、最小の4号溝－7号溝間では9.2mを測り、側溝芯々幅ではそれぞれ13.1m前後、10.0mとなる。方位はN－50°－Wを示す。1次調査で検出した官道路面に見られたような硬化面は認められず、西側溝が位置をずらして掘り直されている点など1次調査とは異なった様相を呈している。また、4号溝の東側に認められた黒色土層（包含層最下層）については、路面下部の地業によって形成された可能性がある。

道路2

道路2は包含層上層の茶灰色土層を除去後、中層の灰色砂層をベースに検出した。東側溝は幅約0.55m、深さ8cmを測る1号溝で、11世紀後半～12世紀前半に埋没したと見られる。西側溝は2号溝で、

幅約1.2m、深さ10～25cmを測る。12世紀後半以降に埋没したものと見られ、奈良時代の官道側溝である4～6号溝を切っている。道路2は官道埋没後に造られ、平安時代末から中世初頭に埋没したものと考えられる。2号溝の北部が西に湾曲しているため、道路幅が一定しないが中央部では4.2mを測り、側溝芯々幅では5.4mを測る。方位はN－65°－Wを示す。



第20図　通行痕実測図（1/100）

（3）通行痕跡（図版10－(1)・12－(1)～(3)・14－(3)・15－(1)～(3)、第16・18～20図）

奈良時代の官道東側溝（7～9号溝）東側で南北方向に延びる11～13号溝が検出された。これらの溝は長さ2.0m、幅0.5m前後である。出土遺物はほとんどなく時期の特定ができないが、奈良時代の官道東側溝と同様に黒色粘質土（包含層下層）除去後に検出されていることから、奈良時代以降に埋没したと考えられる。とぎれとぎれながら、官道東側溝に沿う位置で南北方向に検出されていることから通行痕の可能性がある。

また、黒色粘質土（包含層下層）上面で、幅5.0m前後で不整形溝状・凸凹状遺構が検出された。遺構として実測できているのは12～14号溝よりも以北で、10～40cmほどの凸凹状遺構が帯状に展開し、その周辺が不整形溝状を呈す。しかし、東西土層では黒色粘質土（包含層下層として報告）上に凸凹状遺構が展開し、粘質土との境に暗黄色のマンガン集積層が見られる。また、暗灰色粗砂・暗灰黄色砂・黄白色砂などの砂層が堆積している状況が確認できた。このことから凸凹状遺構は12～14号溝側にも展開していたと考えられる。これらの不整形溝状・凸凹状遺構は一定空間内に一定の方向性を持って遺構が展開していることや土層観察により継続的な空間利用が確認できることなどから、通行痕の可能性があると考えられる。さらに黒色粘質土（包含層下層）の上に遺構が展開していることから、官道東側溝が埋没した後の通行痕と推定される。

（4）ピット（図版10－(1)、第16図）

遺物が出土したピットは11個検出された。そのうち、ピット3～5の遺物を掲載している。ピット1は位置不明なため遺構配置図から除いている。

（5）包含層

包含層は上層（遺構検出に伴う茶灰色土層）、中層（第1面検出の灰色砂層）、下層（第2面覆土の黒色粘質土層）、最下層（奈良時代の道路下の黒色土層）に分けている。

包含層上層は12世紀後半の道路遺構を覆う包含層で、青白磁碗、瓦器碗、李朝雑釉陶器皿、国産陶器高取窯系擂鉢、石鍋などが出土している。出土した遺物の時期に該当する明確な遺構は検出されていないが、奈良から近世までの遺物が継続的に供給される状況にあったと考えられる。

包含層中層は12世紀後半の道路遺構検出面のベースとなる灰色砂層である。砂層内に凸凹状の通行痕跡が確認でき、須恵器、片刃石斧が出土している。

包含層下層は奈良時代の官道検出面を覆う黒色粘質土層である。須恵器と縄目瓦片が出土している。

包含層最下層は道路西側溝4号溝が切り込む黒色土層である。土師器甕と須恵器が出土している。道路形成前もしくは形成時の遺物と考えられる。

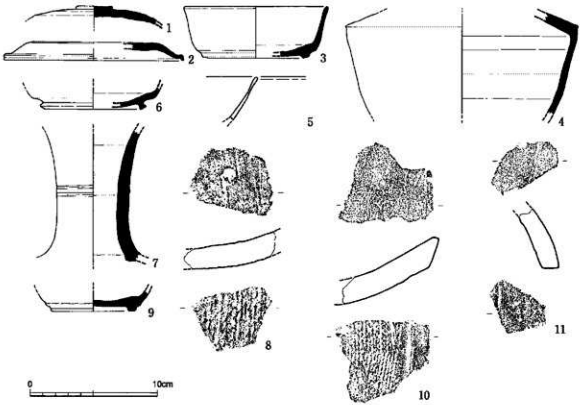
3．遺　物

（1）土器・瓦

2号溝

土　器（図版16、第21図）

1～4は須恵器。1・2は蓋で、1は扁平なつまみがつき、口縁部が欠損する。2は天井部が欠損し、口縁部はやや外反する嘴状を呈す。3は口縁部がやや外反し、逆台形状の高台を呈す。4は壺の肩部のみの破片で、肩部の明瞭な段がつく。5は土師器の椀で、口縁部が外反する形状を呈す。



第21図　溝出土土器実測図（1/3）

4号溝

土　器（図版16、第21図）

6・7は須恵器。6は坏で、底部のみの破片である。高台が撥状の形状を呈し、外反する。7は長頸壺の頸部のみの破片である。外面の頸部中ほどに2条の沈線が巡り、内面にしぼり痕が残る。

瓦（第21図）

8は平瓦。凸面に縄目タタキ、凹面には磨耗しているが模骨痕が残る。焼成はやや良好で瓦質である。

6号溝

土　器（図版16、第21図）

9は須恵器の坏で、底部1/2の破片である。底径6.8cmに復元され、高台がやや外反し、畳付部分に板状圧痕が残る。

瓦（図版16、第21図）

10は平瓦。ヘラケズリによる面取と端部調整と凹面は丁寧なナデ消し、凸面は縄目タタキを有する。焼成は良好で瓦質である。

13号溝

瓦（第21図）

11は丸瓦。ヘラケズリによる端部調整、凹面は模骨痕後粗い布目痕で凸面は丁寧なヘラケズリを有する。色調は淡灰黄色で、焼成は良好で土師質である。

ピット3

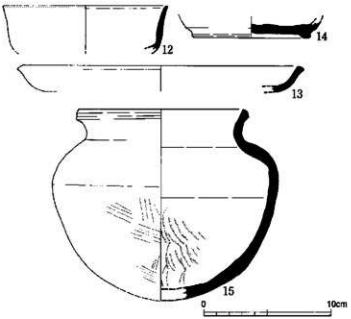
土　器（第22図）

12・13は須恵器。12は坏の口縁部～体部1/8程度の破片で、口径13.0cmに復元できる。13は口径22.7cmに復元できる大皿である。口縁端部が平坦で外反する形状を呈する。

ピット4

土　器（図版16、第22図）

14は須恵器の坏で、底部1/2残存する。高台は八の字状に外反する形状を呈する。色調が赤紫色で、焼成はやや硬質で酸化している。



第22図　ピット出土土器実測図（1/3）

ピット5

土　器（図版16、第22図）

15は須恵器の小壷で、全体の1/2残存する。口径13.7cm、器高15.0cmに復元できる。外面は線状タタキ後部分的にナデ消され、内面は同心円状タタキを有する。

包含層上層

土　器（図版17、第23図）

16は弥生土器の甕で、口縁部1/3程度残存する。内面はヨコ方向、外面はタテ方向のハケ目調整がある。17は須恵器の坏身で、口縁部のみの小片である。かえり部に重ね焼き痕がある。18は白磁椀Ⅴ－４ｂ類で、口縁部～体部1/6程度の小片である。口径17.4cmに復元できる。口縁部は外反し、内面に短い櫛目で描いた文様を有する。19は李朝雑釉陶器皿で、底部4.5cmを測る。胎土は微細な黒色斑点を含み淡黄灰白色で、細かな貫入の入る灰色味かかった半透明釉がかかる。全面施釉で、内面見込みと高台畳付部分に３ヶ所の目跡が付く。20は瓦質土器鉢で、口縁部のみの小片である。外面は口縁部に貼り付けによる２段の突帯が付き、21は国産陶器の高取系擂鉢である。口径15.1cmに復元できる。内外面ともに回転ナデで、外面体部下半に波状沈線を有する。

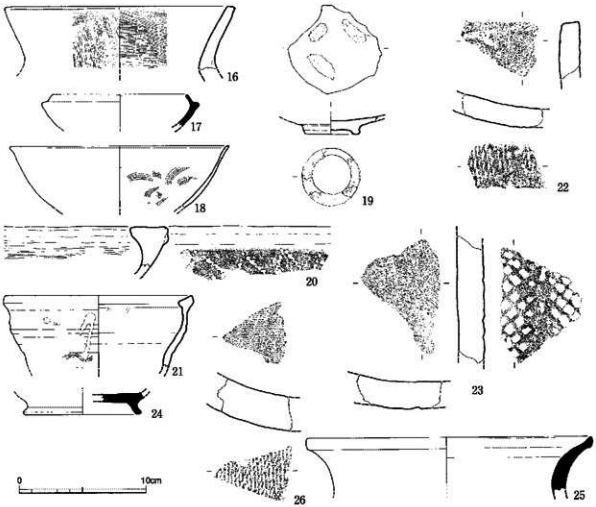
瓦（図版17、第23図）

22・23は平瓦。22は端部ヘラ削り調整で、凹面は磨耗しているが粗い布目痕が見られ、凸面には縄目タタキが確認できる。色調は淡灰黄色で、焼成はやや良好で瓦質。23は端部が欠損し、凹面はやや粗い布目痕で、凸面には格子目タタキである。色調は淡褐色で、焼成は土師質でやや良好である。

包含層中層

土　器（図版17、第23図）

24は須恵器の坏で、底部1/6の破片である。高台は八の字に外反する形状を呈す。



第23図　包含層出土土器実測図①（1/3）

包含層下層

土　器（第23図）

25は須恵器で、甕の口縁部のみの小片である。口縁端部は玉縁状を呈す。口径22.2cmに復元される。

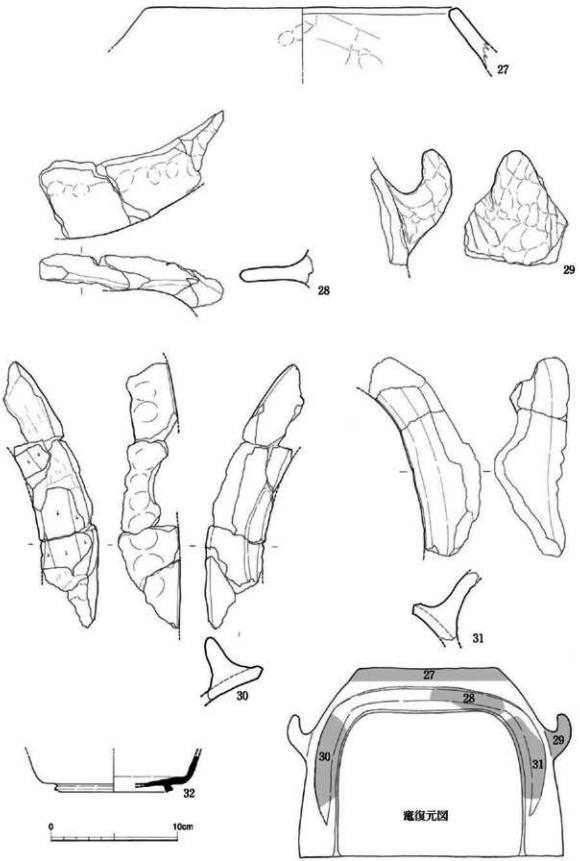
瓦（図版17、第23図）

26は平瓦の小片で、厚さ2.7cmを測る。凹面はやや粗い布目痕、凸面は縄目タタキを有す。胎土は砂粒を多く含みやや密で、色調が暗灰色で須恵質である。

包含層最下層

土　器（図版18、第24図）

27～31は移動式竈の破片で、端部や内面はヘラケズリ調整である。胎土は粗砂粒を多く含み粗く、概ね橙黄色を呈す。使用による煤の付着は確認できなかった。27は口縁部のみの破片で、口径24.5cmに復元できる。28は左側の庇のみの破片である。内外面に庇の成形と貼り付けに伴う指圧痕が残る。30の焚口窓部分に接合する可能性がある。29は把手部分の破片である。貼り付けに伴う工具痕と指圧痕がある。30・31は焚口窓部分である。窓の端部はヘラケズリにより端部調整され、庇部分は指圧痕

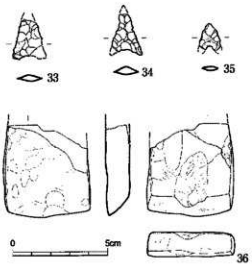


第24図　包含層出土土器実測図②（1/3）

により貼り付けられ、竈内部はナナメ下方向のヘラケズリ調整である。30は右側の焚口窓部分、31は左側の焚口窓部分と考えられる。32は須恵器の坏で、高台が撥状の形状を呈し、外反する。

（2）石　器（図版18、第25図）

33～35は打製石鏃で、石材はサヌカイトである。33・34は先端と片脚が欠損する。平面形は二等辺三角形を呈し、基部の抉りが浅い。35は両脚が欠損する。断面形は2.9mmと薄い菱形を呈す。36は磨製片刃石斧の刃部のみの破片である。刃部は一部欠損する。幅1.35cm、幅4.65cmを測る。石材は灰緑色の頁岩もしくは泥岩と思われ、表面は風化のため灰白色を呈す。



第25図　石器実測図（1/2）

4．小　結

今回の調査では、律令期の官道とこれに伴う側溝、官道の東側に形成された通行痕、平安末～鎌倉時代初期の道路と溝溝が、層位的に明確な状態で検出された。

官道は道路幅13.4～9.2mで、概ね１次調査で検出した官道の幅と符合する。路面の両側に側溝を備えるが奈良時代の末に埋没している。西側溝は４～６号溝３条が並行しているが先後関係は明らかではない。遺構の位置から５号溝が１次調査の西側溝（１号溝）に連続する。包含層下層の下位に検出した７～９号溝が東側溝と考えられるが、位置をずらして掘り直された西側溝に対して、東側溝ではほぼ同位置に重複して掘り直しが行われた状況が看取される。両側溝の間に硬化面などは認められず、明確な路面は残っていなかったが、４号溝の東側に堆積する黒色土（包含層最下層）は道路面下部の地業による整地層である可能性が考えられる。

官道東側溝の東側に検出した11～14号溝とその北側に連続する多数の小穴群は、官道東側溝が埋没した後に堆積した黒色粘質土（包含層下層）を踏み込んで形成された通行痕と見られる。官道の東側に並行して展開する点などは１次調査と共通するものである。

平安末～鎌倉時代初期の道路は、灰色砂層（包含層中層）をベース面としている。道路幅4.2m前後で両側に側溝を設えている。官道を切り込んで重複しており、この時期にはかつて官道が占地していた部分が道路として完全に機能を失っていたことを示している。

表２　２次調査出土土器観察表

法量の（数値）は復元値

挿図番号	図版番号	器別	器種	出土位置	法量(cm) ①口径②器高 ③底径④胴部最大径	残存状態	調整及び特徴
21－１	図版16	須恵器	壺	２号溝中層	つまみ部径3.0	天井部のみ	調整は外面回転ケズリ、内面回転ケズリ後ハジカミ方向ケズリ。胎土は微細な砂粒と角色鉱石を含む良。焼成は良好。色調は内外面灰色、断面灰色。
21－２	図版16	須恵器	壺	２号溝中層	①（7.3）　②（1.4）	全体の1/4	調整は天井部ヘラ切り後水洗調整、外面回転ケズリ、内面回転ナデ調整ナデ。胎土は微細砂を含み、やや密。焼成は良好。色調は内外面は白灰色と暗灰色。断面青灰色。
21－３	図版16	須恵器	坏	２号溝中層	①（11.4）　②（4.1） ③（8.45）	底部1/2	調整は内外面回転ケズリ、底部ヘラ切り。胎土は砂粒を多く含むやや密。焼成は良好。色調は外面明灰色、内面は白灰色で所々に黒色。断面は白灰色。
21－４	図版16	須恵器	壺	２号溝中層	胴部径（18.4）	胴部のみ	調整は内外面とも回転ケズリ。胎土は砂粒と長石粒子を多く含むやや密。焼成は良好。色調は外面灰色、内面は白灰色～灰色。
21－５		土師器	椀	２号溝下層	－	口縁部小片	調整は内外面とも回転ナデ。胎土は微細な砂粒を含むやや密。焼成は良好。色調は外面淡黄灰色・黒色、内面淡黄色。
21－６	図版16	須恵器	坏	４号溝	①（8.4）	底部2/3	調整は外面回転ケズリ、内面回転ナデ後天井部ヘラ切り部分不定方向ナデ。底部ヘラ切り後未調整。高台貼付けに伴う回転ナデ。胎土は砂粒を含み、微細な黒色鉱石を含む。やや密。焼成は良好。色調は内面淡黄灰色、内面灰色。
21－７		須恵器	長頸壺	４号溝	－	頸部のみ	調整は外面回転ナデ、内面回転ケズリ。胎土は砂粒。胎土は砂粒を多く含むやや密。焼成は良好。色調は外面暗灰色～紫黒色、内面灰白～灰色。
21－９	図版16	須恵器	坏	６号溝	③（6.8）	底部1/2	調整は外面回転ナデ、内面回転ケズリ。胎土は砂粒と長石粒子を含むやや密。焼成は良好。色調は外面灰白色、断面灰白色。
22－12		須恵器	坏	ピット３	①（13.0）	口縁部～体部1/8	調整は内外面とも回転ナデ。胎土は微粒な砂粒を多く含むやや密。焼成は良好。色調は外面明灰色、内面は白灰色に黒灰色～灰白色。
22－13		須恵器	大甕	ピット３	①（22.7）	口縁部1/12	調整は内外面とも回転ナデ。胎土は砂粒と粗粒長石を多く含みやや密。焼成はやや良好。焼色黒灰。色調は外面は白灰色～黒灰色。断面暗青灰。
22－14	図版16	須恵器	坏	ピット４	③（9.4）	底部1/2	調整は外面回転ナデ、内面回転ケズリ後ハジカミ方向ナデ。底部ヘラ切り後高台貼付けに伴う回転ナデ。胎土は砂粒を多く含みやや密。焼成は良好。焼色黒味。色調は内外面とも暗青灰。
22－15	図版16	須恵器	壺	包含層上層	①（13.7）　②（15.0）	全体の1/2	調整は外面回転ケズリ後格子目タタキ。内面は格子目当て。胎土は砂粒を多く含むやや密。焼成は良好。色調は内外面とも白灰色。断面淡黒。
23－16	図版17	弥生土器	甕	包含層上層	①（24.5）	口縁部1/3	調整は縦ナデ内ハケ。内面ヨコ方向ハケ。胎土は砂粒を多く含むやや密。焼成は良好。色調は内外面とも褐灰黒。
23－17		須恵器	坏身	包含層上層	①（10.5） かえり部径（12.5）	口縁部小片	調整は内外面回転ナデ。胎土は微細な砂粒をわずかに含みやや密。焼成は良好。色調は外面暗灰色、内面灰色。断面灰色。
23－18	図版17	白磁	椀Ⅴ－４ｂ類	包含層上層	①（17.4）	口縁部～体部1/6	調整は外面回転ケズリ、内面回転ケズリ後丁寧ナデ。素地は微細な白色鉱石を含み密。釉は透明釉。釉調は全体的に薄く、釉面は全体的に光沢。釉は良好。色調は白色。
23－19	図版17	手捏土器(鍋)等	皿	包含層上層	③4.5	底部のみ	調整は内外面指頭ナデ。底部指ナデ。高台、内面見込みとも指ナデ。胎土は微細な砂粒を含むやや密。焼成は良好。色調は外面明黄灰色、内面は白灰色。断面は明黄灰色。底面は明黄灰色、及び黒色。
23－20	図版17	瓦質土器	鉢	包含層上層	－	口縁部小片	調整は外面ヨコ方向ハケ。胎土は微細な砂粒を含みやや密。焼成は良好。色調は内外面とも黒色。断面黄灰白色、及び黒色。
23－21	図版17	国産陶器	擂鉢	包含層上層	①（15.1）	口縁部～体部1/4	調整は内外面ヨコ方向ハケ。内面に櫛状擂目。胎土は微細な砂粒と角色鉱石を含む。焼成は良好。色調は内外面淡黒色～黒灰色。断面黄灰色～灰色。
23－24	図版17	須恵器	坏	包含層中層	③（9.4）	底部1/6	調整は内面回転ナデ、内面不明。底部は右回転ケズリ。胎土は砂粒を多く含みやや密。焼成は良好。色調は外面灰色、内面淡黄灰色。断面淡黄灰色。
23－25		須恵器	甕	包含層下層	①（22.2）	口縁部小片	調整は外面ヨコ撫ケズリ。胎土は微細な砂粒と角色鉱石をわずかに含みやや密。焼成は良好。色調は外面淡黄色～明灰色、内面灰色。断面淡灰黒色。
24－27	図版18	土師器	甕	包含層最下層	①（24.5）	口縁部のみ	調整は外面ヨコナデ後指圧痕。内面ナデ方向ハジカミ。胎土は微細な砂粒を多く含み密。焼成は良好。色調は外面暗黄色～黄灰色。内面淡黄色。断面明黄灰色。
24－28	図版18	土師器	甕	包含層最下層	－	底部のみ	調整は縦ハケナデ。内外面指圧痕。胎土は砂粒を多く含み密。焼成は良好。色調は外面暗黄色～黄灰色。断面暗黄灰色。
24－29	図版18	土師器	甕	包含層最下層	－	把手	調整は内外面指圧痕。胎土は微細砂を多く含み密。焼成は良好。色調は外面暗黄色に黄灰色。
24－30	図版18	土師器	甕	包含層最下層	－	焚口窓部のみ	調整は外面ヨコナデ後指圧痕。内面ナデ方向ハジカミ。胎土は微細砂を多く含み密。焼成は良好。色調は外面淡白色～黄灰色。断面暗黄灰色。
24－31	図版18	土師器	甕	包含層最下層	－	焚口窓部のみ	調整は外面ヨコナデ、内面ヨコ方向ハジカミ。胎土は砂粒を多く含み密。焼成は良好。色調は外面明黄色～黄灰色～暗褐黒色。断面明黄灰色。
24－32		須恵器	坏	包含層最下層	③（9.4）	底部1/2	調整は内外面回転ナデ。内面見込み部分不定方向ナデ。底部ヘラ切り後高台貼付け後、回転ケズリ。胎土は砂粒を多く含みやや密。焼成は良好。色調は外面暗灰色～灰色。内面淡灰色。

V　3次調査の内容

1．調査の概要

先ノ原遺跡3次調査地点は、1次調査地点から北西方に約220m離れた位置にあり、弥生時代の墳墓を主体とする立石遺跡が展開する丘陵の東裾部に当たる。平成3年4月25日から同年6月27日にかけて約800m²の範囲の発掘調査を実施した。調査地の基本層位は地表面から85cmまでは残土、マサ土、瓦礫混じりの黒色土で、その下に20cmほどの厚さで暗茶色粘質土が堆積していた。これを除去すると、砂粒を多く含み茶褐色～青灰色を呈する粘質土の地山面となり、遺構を検出した。遺構面の標高は概ね23.8mを測る。

調査で検出した遺構は、溝6条、ピットで、1号溝と4～6号溝の空間が道路と考えられる。

出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、瓦、石器などである。

2．遺　構

調査で確認できた重複する遺構の新旧関係は次に示したとおりである。

2号溝→3号溝→1号溝

（1）溝

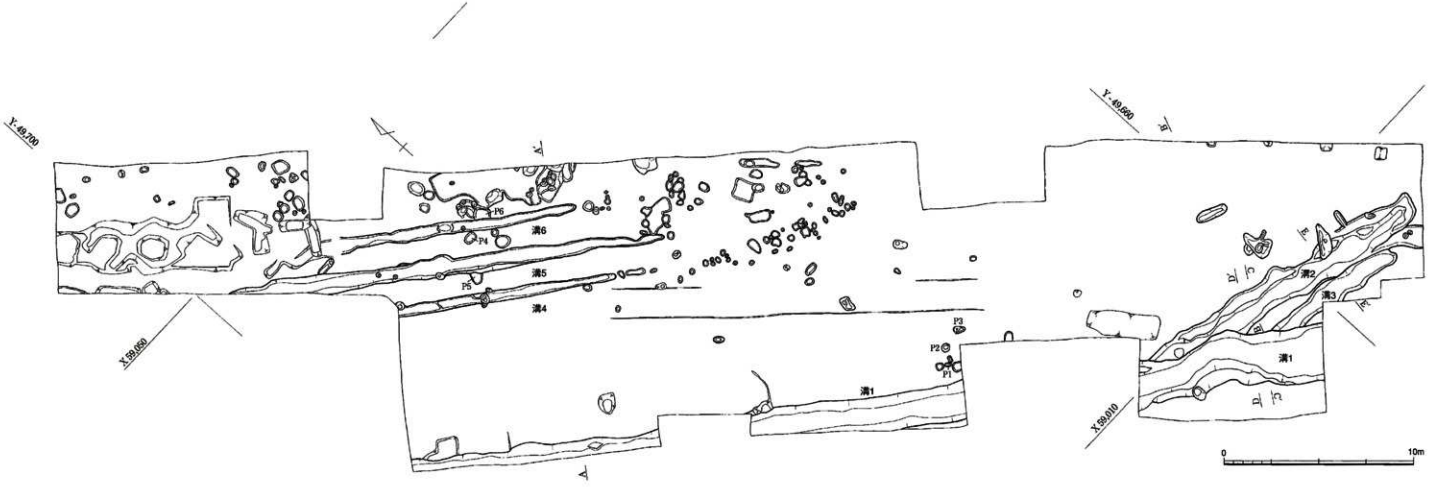
1号溝（図版19－(1)(2)・20－(1)、第26・27図）

調査区南側に位置し、長さ49.0mを検出した。2・3号溝を切る位置関係にある。官道の西側溝と考えられ、幅2.1～3.0m、深さ65～70cmを測る。埋土は上層（黒色粘質土）、中層（黒褐色粘質土）、下層（茶黒色砂）に分層した。奈良時代に掘削され、最終的には12世紀後半に埋没したものと見られる。

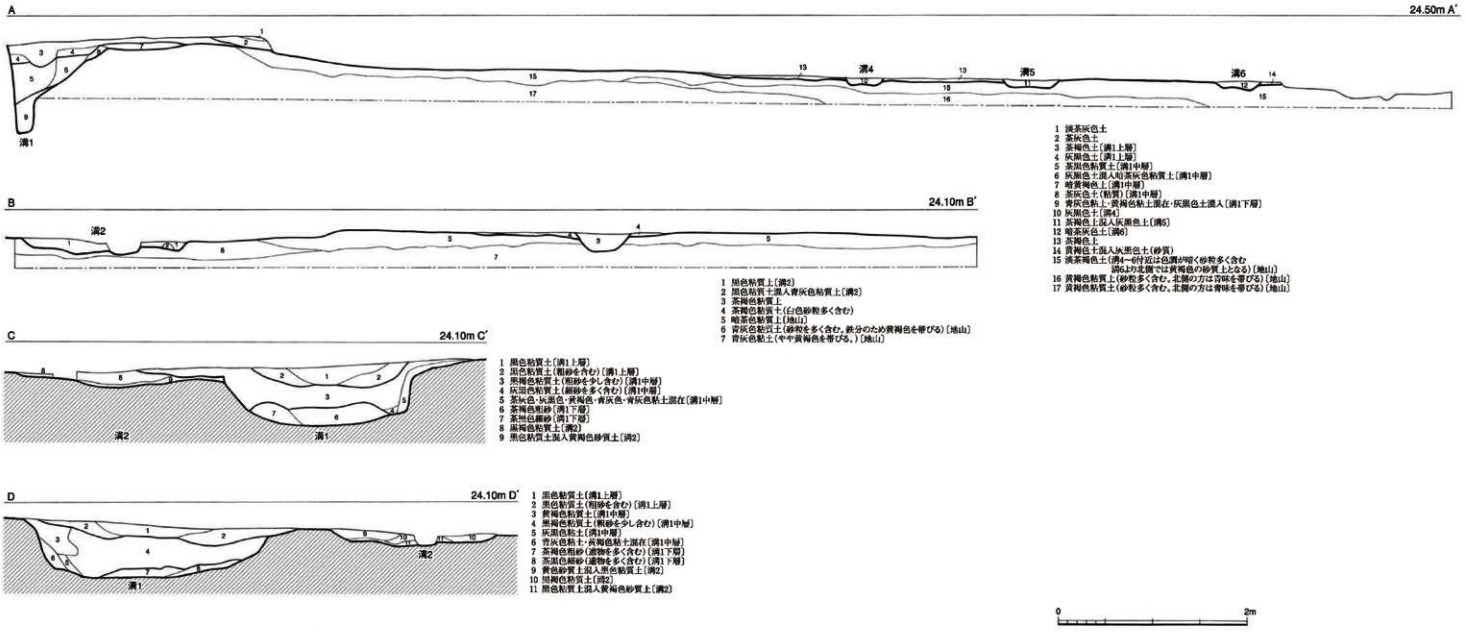
出土遺物は上層で須恵器、土師器、格子目瓦、砥石、軽石、中層で須恵器、土師器、瓦器、下層で須恵器、土師器、縄目瓦、ミニチュア土製品、ナイフ形石器である。

2号溝（図版19－(1)(2)・20－(2)・21・22、第26～28図）

調査区東側に位置し、長さ16.4mを検出した。1・3号溝に切られている。幅1.4～1.85mを測り、深さは30cm前後である。埋土は下から黒色粘質土混入黄褐色砂質土、黒褐色粘質土、黒色粘質土の順に堆積する。溝の東側では、事前調査時の試掘トレンチ内において鉄剣が出土しており、その後の調査で取り上げを行っている。鉄剣の北側のかなり近接した位置から袋状口縁壺と甕が出土した。鉄剣とこれらの弥生土器は、溝底から15cmほど浮いた位置で出土している。遺構検出時の観察では当溝と土坑墓等との重複は確認できなかった。なお、調査区内では2号溝以外にピット6から甕棺の破片が



第26図　3次調査遺構配置図（1/200）



第27図　土層実測図（1/40）

出土しており、調査区南西側の丘陵上に広がる立石遺跡との関連を十分に考慮する必要があろう。

出土遺物はこの鉄剣と弥生土器のみと僅少で、弥生時代後期前半に埋没したものと考えられる。

3号溝（図版19−(1)(2)、第26・27図）

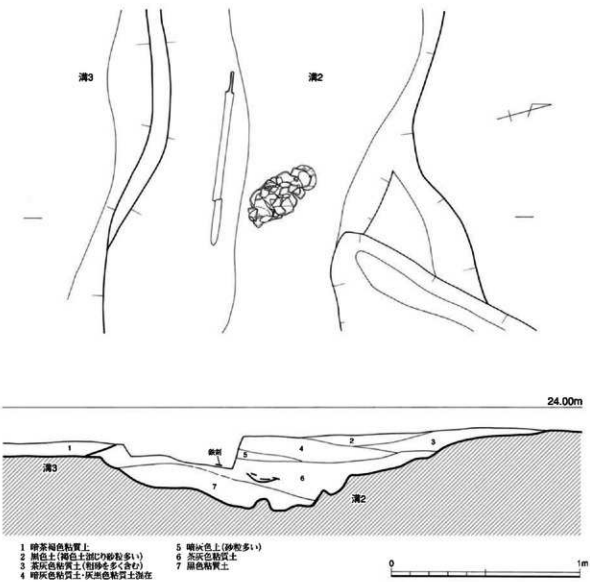
調査区東側に位置し、長さ8.0mを検出した。2号溝を切り、1号溝に切られる位置関係である。幅0.75〜1.2mを測る。深さ0.2m程度で、1号溝に向かって深くなる傾向にある。

出土遺物はない。

4号溝（図版19−(1)(2)、第26・27図）

調査区西側に位置し、長さ11.7mを検出した。幅0.55m、深さ0.2m程度を測る。茶褐色土層に切り込み、埋土は灰黒色土単層である。

出土遺物は須恵器である。



第28図　2号溝実測図（1/20）

5号溝（図版19－(1)(2)、第26・27図）

調査区西側に位置し、長さ23.5mを検出した。幅0.6～0.9m、深さ0.2m程度を測る。茶褐色土層に切り込み、埋土は茶褐色土混じりの灰黒色土である。

出土遺物は須恵器、土師器、縄目瓦である。

6号溝（図版19－(1)(2)、第26・27図）

調査区西側に位置し、長さ17.0mを検出した。幅0.5～0.6m、深さ0.1m前後を測る。茶褐色土層に切り込み、埋土は暗茶灰色土である。

出土遺物は須恵器、土師器、縄目瓦、砥石である。

（2）道　路（図版19－(1)(2)・20－(1)、第26・27図）

西側溝は幅2.1～3.0m、深さ65～70cmを測る1号溝で、12世紀後半に埋没したと見られる。東側溝は4～6号溝の3条が並行している。4号溝は幅55cm、深さ20cmを測る。5号溝は幅約80cm、深さ20cm。6号溝は幅約55cm、深さ約10cmである。いずれも8世紀代に埋没したものと見られる。東西の溝溝では規模の違いに顕著な差が認められるほか、東側溝が管理されなくなり埋没した後も、西側溝は掘り直しが行われ、平安時代の末頃に再び機能を回復したようである。道路幅は1号溝－4号溝間では7.8m、1号溝－5号溝間が9.5m、1号溝－6号溝間は11.6mを測る。側溝芯々幅では、それぞれ9.3m、11.2m、13.1mとなる。方位はN－50°－Wを示す。1・2次調査で検出した官道に見られたような路面に対する地業は特に認められなかった。

（3）ピット（図版19－(1)(2)、第26図）

遺物が出土したピットは6つで、そのうち遺物を図示できたのはピット6のみである。ピット6は道路東側溝の6号溝に切られる位置関係にあり、幅80cm、深さ15cmほどを測る。

出土遺物は弥生土器甕棺、須恵器である。

（4）包含層

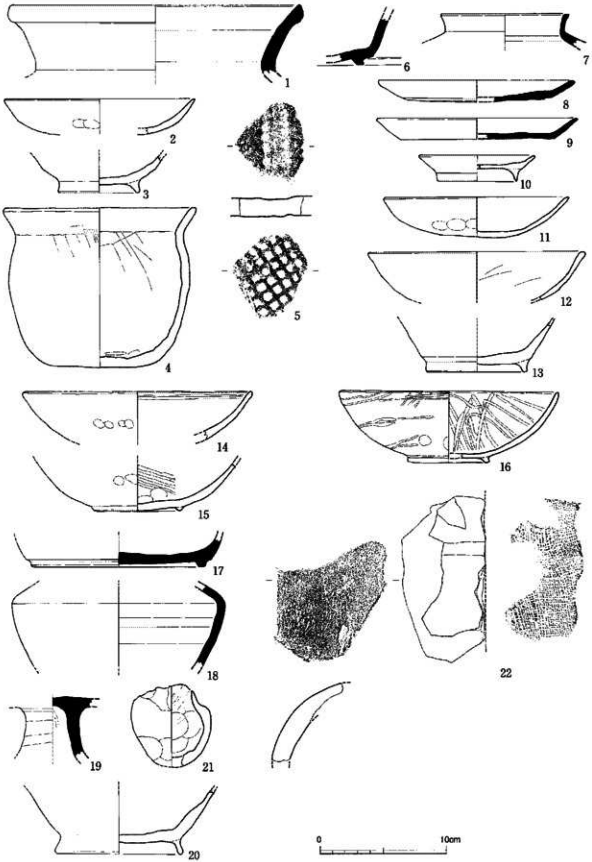
包含層は調査区全体の遺構検出時に出土した遺物を上層、その下に位置し、道路東側溝の4～6号溝周辺で検出した黒色土層に含まれる遺物を下層出土として報告する。

出土遺物は上層で須恵器の蓋、甕が認められる。下層では土師器坏が認められ、奈良時代に堆積したものと見られる。

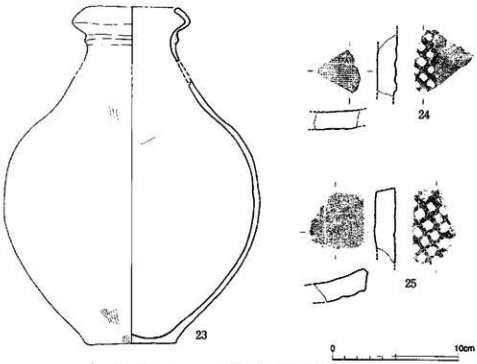
3．遺　物

（1）土器・瓦・土製品

1号溝上層



第29図　1号溝出土土器実測図（1/3）



第30図　2・5・6号溝出土土器実測図（1/3）

土　器（図版23、第29図）

1は須恵器の甕で、口縁部1/6残存の破片である。口縁端部が玉縁状を呈し、内外面ともに回転ナデ。焼成は良好で硬質。2～4は土師器。2は丸坏で口縁部～体部下半の1/4程度残存する。復元口径15.1cmを測り、内面見込み部分ヨコナデ後不定方向ナデ、外面体部下半はヘラ切り後指圧痕が確認できる。3は椀の底部1/6残存の破片である。高台は高い八の字状で、復元高台径6.5cmを測る。4は甕で、全体の2/3残存する破片である。口縁部はヨコナデ、外面体部はタテハケ後ナデ、内面は板状工具によるタテ方向ナデが残る。口縁部は短く屈曲し、底部は平坦な形状を呈す。

瓦（図版23、第29図）

5は平瓦。凹面は磨耗著しく布目痕は確認できないが模骨痕が残る。凸面は格子目にばらつきのあるタタキがある。色調は淡黄灰色で、焼成はやや不良で土師質。

1号溝中層

土　器（図版23、第29図）

6～9は須恵器。6は坏の底部のみの小片である。高台は八の字状に外反する形状を呈す。7は短頸壺で、復元口径11.0cmを測る。8は皿でほぼ完形品である。口径15.6cm、器高1.7cmを測る。底部ヘラ切り後ナデ調整。9は皿で、全体の1/7残存する。復元口径16.0cm、器高1.7cmを測り、底部ヘラ切り後未調整。10～13は土師器。10は高台の付く小皿で、全体の1/3残存する。口径9.2cm、器高2.1cm、高台径6.1cmに復元できる。口縁部はやや外反し、底部は回転ナデ後板状圧痕が残る。高台は長い形状を呈す。11はほぼ完形品の丸坏である。口径15.7cm、器高3.2cmを測る。内外面ともに磨耗が著しいが、外面は底部押し出しに伴う指圧痕と底部に板状圧痕が残る。12は丸坏で口縁部1/2残存す

る。口縁部は丸く、外面はヘラ切り後押し出しに伴う指圧痕、内面には工具によるヨコナデが残る。13は椀で、底部のみの破片である。高台径8.0cmを測り、高台はやや外反する形状を呈す。

14～16は筑前系瓦器椀である。14は口縁部～体部下半1/6程度の破片で、復元口径18.2cmを測る。口縁端部は玉縁状に丸くやや外反し、ヨコ方向のミガキを有す。15は底部のみの破片で、底径6.6cmを測る。内面はナナメ方向のミガキと見込み部分に指圧痕、外面には押し出しに伴う部分的な指圧痕が残る。16は全体の1/2残存する破片で、復元口径17.4cm、器高5.6cm、高台径6.5cmを測る。内面はヨコナデ後一定方向ミガキ、外面は4分割されたヨコ方向のミガキ調整で、底部はイト切り痕が残る。八の字状に外反する低い高台を有する。

1号溝下層

土　器（図版23・25、第29図）

17～19は須恵器。17は底部1/4程度残存の坏である。高台径13.8cmに復元できる。18は壺の肩部1/4程度の破片である。肩部は稜のつかない形状を呈す。19は高坏の脚部のみの破片である。坏部見込み部分にナデ調整、脚部内面に接合時しぼり痕が残る。20は赤色塗彩土師器の椀である。高台はやや八の字に外反し、高台径10.1cmに復元できる。21はミニチュア土器で、全体の1/2残存する。内外面ともに指圧痕で成形され、内面に口縁部成形のしぼり痕が残る。

瓦（第29図）

22は丸瓦。凸面は磨耗が著しいが縄目タタキが確認でき、凹面は粗い布目痕が残る。色調は内外面黒色～淡灰色、断面淡白茶色で、焼成はやや良好で瓦質である。

2号溝

土　器（図版24、第30図）

23は弥生土器。袋状口縁壺で、口縁部・体部・底部は直接接合しないが、出土状況や遺物の特徴から図上復元を行っている。これとほぼ同位置から出土した甕は、胴部のみで図化できなかった。

5号溝

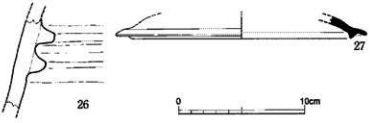
瓦（図版25、第30図）

24は平瓦の小片である。凹面は細かな布目痕後ナデ、凸面は正格子目タタキ後部分ナデ消しである。色調は灰色で、焼成は良好で須恵質である。

6号溝

瓦（図版25、第30図）

25は平瓦で、四隅部分の一片である。凹面は細かな布目痕で、凸面は正格子目タタキである。長軸方向の端部はヘラケズリ調整で、短軸方向の端部は面取りのあるヘラケズリ調整を有す。焼成はやや



第31図　ピット出土土器実測図（1/3）

良好で、瓦質である。

ピット6

土　器（図版25、第31図）

26は弥生土器。甕棺胴部付近の２条突帯部のみの小片である。内面は磨耗して調整不明だが、外面に突帯部貼り付けに伴うヨコナデが残る。27は須恵器の壺である。口縁部1/6残存し、口径19.0cm、かえり部径17.2cmに復元できる。外面に焼成時の重ね焼き痕があり、焼成は堅緻。

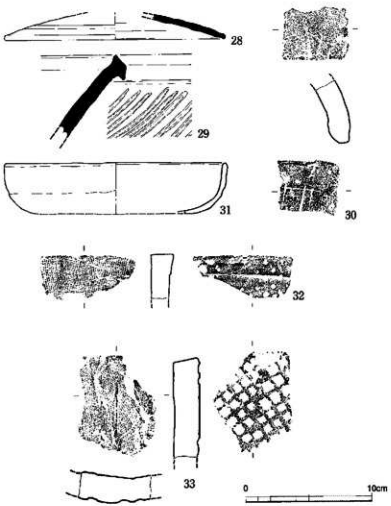
包含層上層

土　器（図版25、第32図）

28・29は須恵器。28は全体の1/6程度残存の壺である。天井部はヘラ切り後ナデ調整で、焼成時の重ね焼き痕がある。口縁端部は丸味のある嘴状を呈す。29は口縁部のみの小片で、口縁端部が菱形に近く肥厚する。外面にヘラ状工具による幅５mm程度の放射状文を有す。

瓦（図版25、第32図）

30は丸瓦で、四隅部分の一片である。端部は面取りのあるヘラケズリ調整で、凸面はナデ消し、凹



第32図　包含層出土土器実測図（1/3）

面は模骨痕と思われる筋状の痕跡が見られる。胎土はやや粗く、焼成は良好で須恵質である。

包含層下層

土　器（図版25、第32図）

31は土師器の坏である。口縁部は直口し、内面見込み部分は指圧痕、外面は指ナデにより丸い形状を呈す。

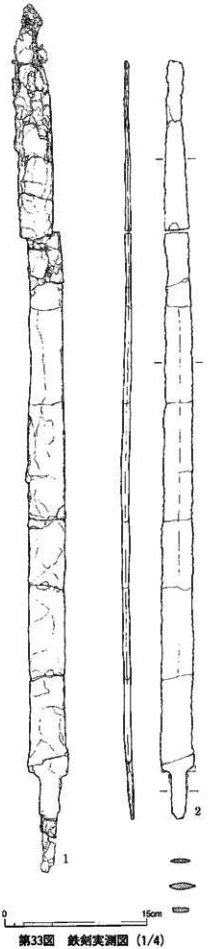
瓦（図版25、第32図）

32は平瓦。長軸方向の端部のみの小片である。端部はヘラケズリ調整で外面に段を有し、断面端部付近は器壁が肥厚する。凹面は細かな布目痕、凸面は格子目タタキが残る。色調は黄茶色で、焼成は良好で土師質である。33は平瓦。凹面は粘土継ぎ足し後やや粗めの布目痕が残り、凸面には正格子目タタキを有す。色調は淡黄茶色で、焼成は良好で土師質である。

（2）鉄　剣（図版24、第33図）

2号溝から出土した鉄剣は、1991年に現場から取り上げられ、1995年に業者に保存処理を委託した。今報告に伴い鉄剣を観察したところ、錆は全て除去され、現場で作成した鉄剣検出状況図やクリーニング前に撮影されたX線写真より痩せすぎの印象を受けた。錆が進行しオリジナルの表面が失われていたため、現在の表面まで錆を落としたのであろうが、実測者にとって、過度に錆とりされた遺物は、その形が本当に正しいのか否か、そのモノから検証することを困難にしているように思える。鉄製遺物を実測する者にとっては、錆も重要な情報である。その情報を著しく損なわせる行為は避けるべきである。遺物に悪影響のない限りでは、鉄製遺物における過度の錆とりを控えた方が良いように感じている。鉄剣の実測は保存処理後に行ったため、比較検証のため、現場の鉄剣検出状況図を併せて掲載する。1は検出状況図で、2は保存処理後に図化したものである。

1の検出状況図をみると、切先側ほど劣化、破損し、茎の下方は砕片が残存するのみあった。現状では破損箇所は復元されていない。クリーニング前に撮影された鉄剣写真では、切先部分は確認できなかったことから、切先と茎下端部分は、取り上げの際に離散した可能性が高い。検出したのは剣身のみで、把



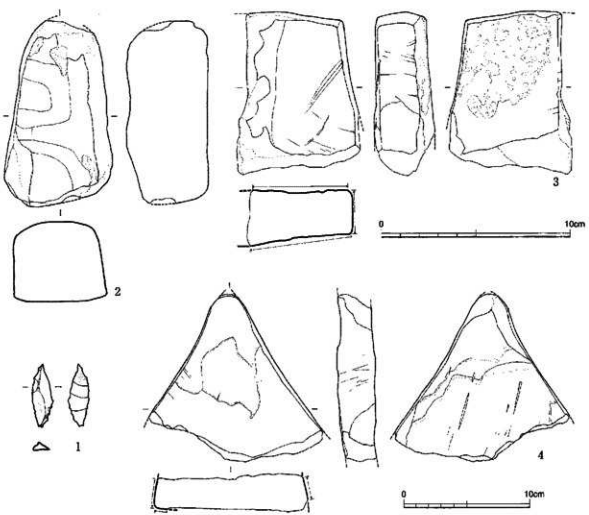
第33図　鉄剣実測図（1/4）

などの装具は確認できていない。1から全長は92.1cm、刃部長81.9cm、茎部10.2cm程に復元できる。刃部断面について2では鎬を持つように見える。保存処理後の刃部厚は0.7cm程度である。関の形状について、2では斜めに切れ込む斜角関にみえるが、保存処理前に撮影されたX線写真を確認すると、直角関であることが確認できる。誤って成形されているようである。そのためX線写真を参考に、刃部から茎部にいたる形を破線で復元した。茎部の幅は上下でほとんど変わらず、目釘の痕跡は確認できていない。

先ノ原3次調査出土の鉄剣において最大の特徴は、全長が92.1cmと非常に長大であることであろう。日本列島において鉄剣が盛行する弥生時代から古墳時代にかけて出土した鉄剣の中でも最大規模であることは間違いない。

(3) 石　器 (図版25、第34図)

1～3は1号溝、4は6号溝出土である。1はナイフ形石器である。完形品で、タテ33.5mm、ヨコ11.0mm、厚さ5.0mmを測る。断面は三角形状を呈し、石材は黒曜石である。



第34図　石器実測図 (1/2・1/3)

2は角閃石や砂粒を含む軽石で、色調は淡黄灰白色を呈す。タテ14.8cm、ヨコ5.7cm、厚さ4.3cmを測る。用途は不明だが、平滑な面は確認できる。

3・4は砥石。3の石材は色調が淡黄色から淡黄緑色で、金雲母を多く含む砂岩である。研ぎ痕の残る面と一部に蔵き状の痕跡がある。4の石材は色調が暗黄茶色で、金雲母を含む砂岩である。欠損しているが、三角形状を呈す。側面に研ぎ痕が確認できる。

4．小　結

今回の調査で検出した主な遺構は、側溝を伴う道路遺構と弥生時代の溝である。

道路遺構は、検出位置と方向性から1号溝と4～6号溝間の幅7.8～11.6mを測る空間地が道路として利用されたものと理解される。調査では明確な路面や路床は認められなかったが、奈良時代に官道の側溝として西側に1号溝、東側に4～6号溝が掘削されている。3条の貧弱な東側溝に比べて、西側溝は幅広く深さもしっかりと掘り込まれるが、当調査地は西側に丘陵が隣接しているため、丘陵からの侵水を防ぐために、西側溝をより深くする必要があったものと考えられる。また、東側溝が奈良時代のうちに埋没したと見られることに対して、西側溝の最終的な埋没時期は12世紀後半である。東側溝の埋没時期は律令期に官道として保守管理が行き届いていた下限期を表すものと思われる。その後、道路の再整備が行われたのか、西側溝は平安時代末頃に掘り直されたと見られる。しかし、このときには東側溝は不用のものとされたようである。

なお、今回の調査で特筆すべき出土遺物は、官道西側溝に切られる2号溝から弥生時代後期前半の袋状口縁壺等とともに出土した鉄剣である。弥生時代の鉄剣としては他に類を見ない長大さで、この鉄剣を保持し得た人物の権勢が偲ばれる。出土状況については前述したとおりだが、このような鉄剣が溝に伴うことは極めて稀な事例と言える。近年、静岡県浜松市の鳥居松遺跡[註1]において6世紀の円頭大刀が自然河川に抜き身の状態で沈められていた事例が報告され、河川祭祀に関する考察がなされている。無論、彼此では地域と時期が全く異なり、出土状況に関しても幅20mの河川からの出土と、幅2mほどの小溝からの出土では大きな隔たりがある。これをもって類似する事例とすることには躊躇を禁じえないが、なんらかの祭祀行為が2号溝で行われた可能性を想定することは出来よう。しかし、当地西側の丘陵上に展開する立石遺跡からは銅鏡、銅剣等の青銅器が出土しており、弥生墳墓群が存在している。これとの関連性についても十分に考慮する必要があろう。

註1　㈶浜松市文化振興財団『鳥居松遺跡5次』円頭大刀報　2009

表3　3次調査出土土器観察表

法量の（数値）は復元値

挿図番号	図版番号	器別	器種	出土位置	法量(cm) ①口径②器高 ③底径④胴部最大径	残存状態	調整及び特徴
29－1	図版23	須恵器	甕	1号溝上層	①（23.4）	L字縁部1/6	調整は内外面回転ナデ。胎土は細かく砂粒を多く含んでやや堅。焼成は良好。色調は外面暗灰色～黒色、内面灰色～暗灰色。断面は灰白色。
29－2	図版23	土師器	丸底	1号溝上層	①（15.1）	口縁部～体部1/4	調整は内外面回転ナデ。内面黒ふる部分は刷毛ナデ後ヘラ状工具によるナデ。内面暗色ナデ。内面見込み部分は圧痕。胎土は砂粒をやや含んでやや粗。焼成は良好。色調は内外面とも淡赤褐色。
29－3	図版23	土師器	椀	1号溝上層	③（6.5）	底部1/6	調整は内面暗色ナデ。胎土は細かく砂粒を含んで堅。焼成は良好。色調は外面淡橙白色。内面黄褐色。
29－4	図版23	土師器	甕	1号溝上層	①（15.3）　②（12.6）	全体の2/3	調整は口縁部はコナデ。外面ナデ。内面ナデ。胴部は外面ヘラ状工具によるナデ。内面暗色ナデ。内面見込み部分は圧痕。胎土は砂粒をやや含んでやや粗。焼成は良好。色調は内外面とも淡赤褐色。
29－6	図版23	須恵器	坏	1号溝中層	－	底部小片	調整は外面ナデ。内面回転ナデ。底部ヘラ切り後周辺部付け高台。胎土は細砂を砂粒をわずかに含み密。焼成は良好。色調は内外面とも黄灰色。
29－7	図版23	須恵器	短頸壺	1号溝中層	①（11.0）	口縁部～頸部1/4	調整は外面回転ナデ。胎土は細砂を砂粒を含みやや密。焼成は良好。色調は内面灰褐色。外面黒色。
29－8	図版23	須恵器	皿	1号溝中層	①15.6　②1.7　③10.7	ほぼ完形	調整は口縁部回転ナデ。内面見込み部分ナデ。底部ヘラ切り後ナデ。胎土は細砂を多く含みやや密。焼成は良好。色調は内外面とも淡黄褐色。
29－9	図版23	須恵器	皿	1号溝中層	①（16.0）　②（1.7） ③（12.3）	全体の1/7	調整は内外面回転ナデ。胎土へ砂粒。色調は暗灰褐色。焼成は良好。色調は内外面とも黄褐色。
29－10	図版23	土師器	皿	1号溝中層	①（9.2）　②（2.1） ③（6.1）	全体の1/3	調整は内外面回転ナデ。内面回転ナデ後見込み部分ヨコナデ。胎土は砂粒を多く含んでやや密。胎土は微細な砂粒を含む。焼成は良好。色調は内外面とも淡黄色。
29－11	図版23	土師器	丸底	1号溝中層	①15.7　②3.2	ほぼ完形	調整は口縁部回転ナデ。内面見込み部分ナデ。底部ヘラ切り後ナデ後強くなぜ。胎土は微細な砂粒を含みやや密。焼成は良好。色調は内外面とも淡黄色。
29－12	図版23	土師器	丸底	1号溝中層	①（17.2）	L字縁部1/2	調整は口縁部回転ナデ。外面回転ナデ後ナデ。内面上鼎に上の所。胎土は細砂を砂粒を含みやや密。焼成はやや良好。色調は内外面とも淡黄褐色。
29－13	図版23	土師器	椀	1号溝中層	③（8.0）	底部のみ	調整は内外面回転ナデ。内面見込み部分ナデ。底部ヘラ切り後高台貼付け。胎土は細砂を砂粒を多く含んでやや密。焼成はやや良好。色調は内外面とも淡黄色。
29－14	図版23	瓦器	椀	1号溝中層	①（18.2）	口縁部～体部1/6	調整は口縁部ヨコナデ。外面ヨコナデ後一部指圧痕。内面ヨコ等。胎土は細砂を砂粒を多く含んでやや密。焼成は良好。色調は外面暗灰色。内面淡黄灰白色～暗色。断面淡黄灰白色。
29－15	図版23	瓦器	椀	1号溝中層	③（6.6）	底部～体部のみ	調整は外面ヨコナデ後部分的ナデ。内面ヨコナデ。底部は外面ヨコナデ。内面見込み部分指圧痕。底部は外面ヨコナデ。胎土は細砂を砂粒を含みやや密。焼成は良好。色調は内外面とも淡灰白色～黒色。断面淡灰白色。
29－16	図版23	瓦器	椀	1号溝中層	①（17.4）　②5.6　③6.5	全体の1/2	調整は内外面ヨコナデ後部分的ミガキ。底部小部分指圧痕。胎土は砂粒を多く含んでやや密。焼成は良好。色調は内外面とも黒色～淡灰白色。断面淡灰白色。
29－17	図版23	須恵器	坏	1号溝下層	③（13.8）	底部のみ	調整は外面回転ナデ。内面見込み部分回転ナデ後不定方向ナデ。底部ヘラ切り後周辺付け高台。胎土は砂粒を多く含んでやや密。焼成は良好。やや硬化気味。色調は外面淡黄色。内面淡黄褐色。
29－18	図版23	須恵器	壺	1号溝下層	肩部径（18.9）	肩部1/4	調整は外面外面回転ナデ。胎土は細砂を砂粒を含みやや密。焼成は良好。硬化。色調は外面暗灰色。内面茶褐色。断面暗灰褐色～茶褐色。
29－19	図版23	須恵器	高坏	1号溝下層	－	脚部上半のみ	調整は外面回転ナデ。内面ヘラ切り。胎土は細砂を砂粒を含みやや密。焼成は良好。色調は外面暗灰色。内面茶褐色。内面黄褐色。
29－20	図版23	土師器	椀	1号溝下層	③（10.1）	底部のみ	調整は外面回転ナデ。内面見込み部分ナデ。底部ヘラ切り後高台貼付け。胎土は微細な砂粒を含み密。焼成はやや良好。色調は外面うす黄色～淡黄褐色。
29－21	図版25	ミニチュア土器	不明	1号溝下層	②（4.2）	全体の1/2	調整は外面ナデ。胎土は細砂を砂粒を含み密。焼成は良好。色調は外面淡黄褐色～暗褐色。内面淡黄褐色。
30－23	図版24	弥生土器	袋状口縁壺	2号溝	－	全体の1/2	調整は外面ヘラ磨。胎ヘラ状ナデ。内面ナデ。内面ヘラ状ナデ。胎土は細砂を砂粒を含みやや粗。焼成は良好。色調は外面淡白色～暗灰色。内面淡白色～暗白色。
31－26	図版25	弥生土器	甕棺	ピット6	－	胴部突帯部のみ	調整は外面回転ナデ。内面不明。胎土は砂粒を含み粗。焼成は良好。色調は外面内面とも暗色～淡黄色。
31－27	図版25	須恵器	壺	ピット6	－	L字縁部1/6	調整は外面回転ナデ。胎土は細砂を砂粒を含みやや密。焼成は良好。色調は外面暗灰色～淡灰色。内面淡灰色。断面淡灰色～淡赤灰色。
32－28	図版25	須恵器	壺	包含層（上層）	①（17.2）	全体の1/6	調整は外面ヘラナデ。内面回転ナデ。内面回転ナデ後ナデ。胎土は細砂を含み密。焼成はやや良好。色調は外面淡灰色～淡黄灰色。内面淡黄灰色。断面淡黄灰色～淡黄灰色。
32－29	図版25	須恵器	甕	包含層（上層）	－	口縁部小片	調整は外面回転ナデ。外面ヘラ工具による波状文。胎土は細砂を砂粒を含み密。焼成は良好。色調は暗灰色。
32－31	図版25	土師器	坏	包含層（下層）	①（17.6）	口縁部～底部1/8	調整は外面回転ナデ。内面回転ナデ後指圧痕。底部回転ナデ後ナデ。胎土は微細な砂粒と金雲母を含みやや密。焼成は良好。色調は内外面とも淡橙色～淡赤色。断面淡赤色。

Ⅵ まとめ

先ノ原遺跡１～３次の調査における最大の成果は、官道の検出である。ここでは各調査で確認された官道に関する遺構と、周辺の官道関連遺跡との比較検討を行うことでまとめとしたい。

１次調査では側溝間の幅約9.2mを測る道路を29.5mにわたって検出した。道路面には砂が敷かれ、奈良時代の遺物を含んでいる。これから南に約15mの間隔を空けて実施した２次調査では幅約9.4mの奈良時代の官道を17.5m検出し、１次調査地点の北方約220mの３次調査では、幅7.8～11.6mの道路を約50m検出した。西側溝には奈良時代から12世紀にかけての遺物が含まれている。いずれも官道として整備されたものだが、平安時代に入った頃から道路の維持管理が疎かになり、側溝も埋没して行ったようである。しかし、１・２次調査で官道の東側に検出した通行痕や、２次調査で官道に重複して検出した中世初頭に埋没したと見られる幅4.2mの道路遺構（道路２）の存在が表すように、一旦整備された大規模な道路は“官”の大道としての役割を終えても当地の土地利用に大きく影響を及ぼし、かつての道路上やその周辺には人馬の往来が続いていたものと見られる。また、３次調査の西側溝は平安時代末頃に掘り直された可能性が高い。大野城市の谷川遺跡で検出された官道側溝も11世紀末～12世紀の遺物が含まれており、この時期に廃れていた道路の再整備を行なった可能性が想定される。

先述した通り、先ノ原遺跡で検出した官道は、大宰府政庁から水城西門を経て、那津（博多湾）沿岸に設置された鴻臚館を結ぶ古代官道（西門ルート）である。この官道の発掘調査に関しては、昭和53年に福岡県教育委員会によって実施された春日公園内遺跡の調査が初めてで、先ノ原遺跡１次調査地点はここから約200m、３次調査地点は約420m北方の位置である。なお、水城西門からは約2.2～2.4㎞の距離である。第１図に示したように水城西門から北側では、谷川遺跡、池田遺跡、九州大学・御供田遺跡、春日公園内遺跡、先ノ原遺跡で官道が確認されており、これらは一直線上に並び官道の直進性をよく表している。

さて、春日公園内遺跡の官道であるが、東西両側に側溝を持つ直線的なもので、規模は側溝の内法幅で約９mを測り、調査区の端々までの200mを超える長さを検出している。方向は真北に向かって約50度西にふれる。側溝は西側溝の方が東側溝より規模が大きく、西側溝の幅が１～２m、深さ約1.5mであるのに対し、東側溝は最大部の幅が約１m、深さも50㎝程度とされている。路面は平坦でガチガチに硬化しており、路面上に遺物は認められていない。側溝の埋土に９世紀頃の土師器類と瓦片が少量含まれていたことから、９世紀末には官道としての維持管理が疎かになり、側溝の埋没が始まったものと見られている。東西の側溝で埋没時期に時期差が認められるかは不明である。以上は『春日市史』からの引用であるが、先ノ原遺跡との共通点として西側溝の規模が大きいことがあげられる。官道の施工に際しては路線の方向性を規定するために、まず、片側の側溝が設定されたのではなかろうか。このとき計画の基準となった側溝が、より大きく明確に造られることは自然なことであろう。

また、春日公園内遺跡、先ノ原遺跡の場合は西側が丘陵になっており、丘陵からの雨水等の浸入を抑える意味でも西側溝が重視されたものと思われる。

官道の施工と改廃の時期については、西門ルートでは太宰府市の前田遺跡[註1]や筑紫野市の大宰府条坊跡99次調査[註2]などの成果から、水城の南側では７世紀後半から８世紀初頭頃に造られた可能性が高く、９世紀代には廃絶していたとされている。官道が国家事業としての道路建設である以上、施工時期が水城の南北で大きく違いがあるとは思えないが、廃絶時期についてはかなり近接した地点であっても、相当の開きが表れる場合がある。先ノ原遺跡３次調査では、西側溝の最終埋没時期が12世紀まで降っており、これは官道が出発点から到着点までの一貫した道路として機能しなくなった後も、場所によっては断続的に部分的な道路としての使用があったことを表しているのだろう。

現在までの官道検出地の中で、明確な遺構を伴う調査事例としては、先ノ原遺跡が最も北方に位置している。今後さらに北方で検出される可能性は十分にあるが、ここより北側はさらに低湿な土地が数㎞にわたって続くことになる。池田遺跡などのように地盤の脆弱箇所には盛土整地が行われている可能性も考慮して、遺構検出に努める必要がある。

註１　太宰府市教育委員会『大宰府・佐野地区遺跡群Ⅹ』　太宰府市文化財調査報告書第50集　2000
　　太宰府市教育委員会『大宰府・佐野地区遺跡群14』　太宰府市文化財調査報告書第63集　2002
註２　筑紫野市教育委員会『大宰府条坊跡第99次発掘調査』　筑紫野市文化財調査報告書第52集　2000

春日公園内遺跡から鴻臚館方面を望む

図　　版

1　次　調　査

（1） 先ノ原遺跡1次調査全景

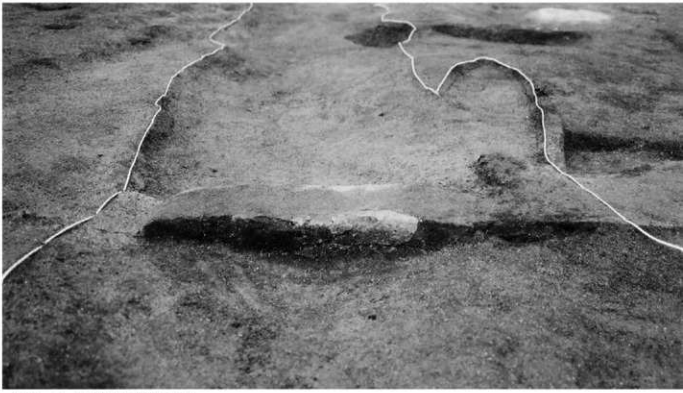
（2） 道路遺構1検出状態

図版 2

（1） 道路遺構 1 黄白色砂・暗灰色砂質土層除去状態（南から）

（2） 道路遺構 1 土層（南から）

（1） 通行痕土層（南から）



（2） 1・2号溝土層（南から）

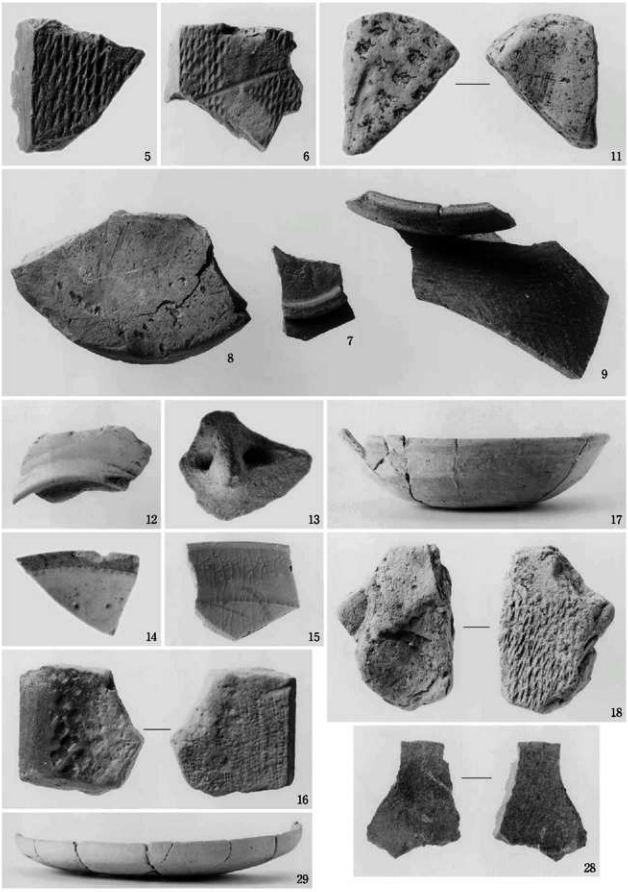
図版 4

（1） 3・4号溝土層（南から）

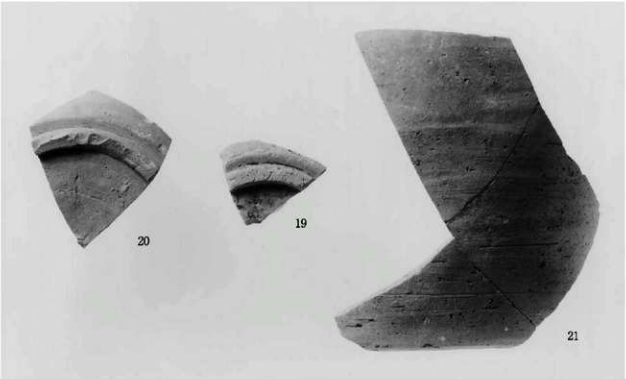
（2） 5号溝土層（南から）

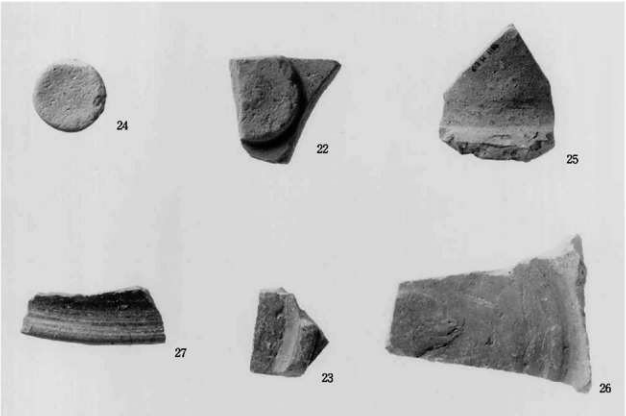
（1） 11号Ａ溝土層（南から）

（2） 11号Ｂ溝土層（南から）



1・5・6～10号溝及びピット出土土器・瓦

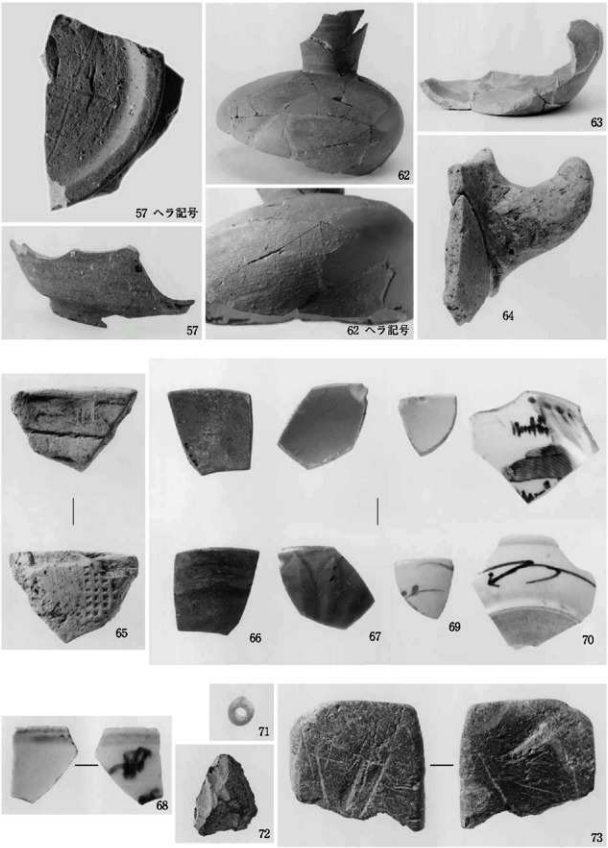




道路面出土土器

32
33 ヘラ記号
33
34 ヘラ記号
34
35
37
38
39
42
44
45
48
54
55
56
49 ヘラ記号
49
50
51
52
53
53 ヘラ記号

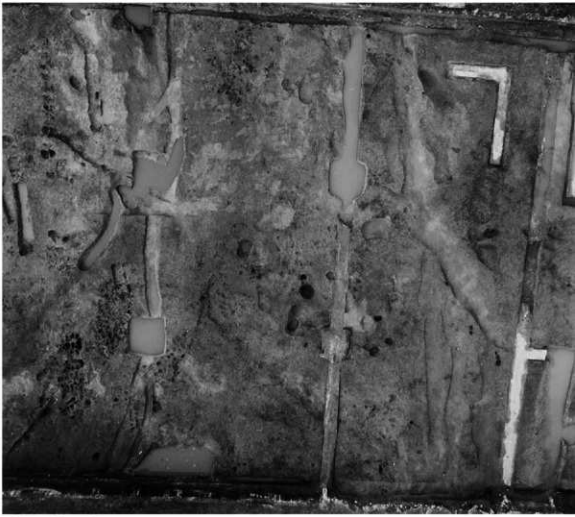
包含層出土土器・瓦



包含層及び撹乱出土土器・瓦（57・62～70）、小玉（71）、石器（72・73）

2　次　調　査

（1） 先ノ原遺跡２次調査全景

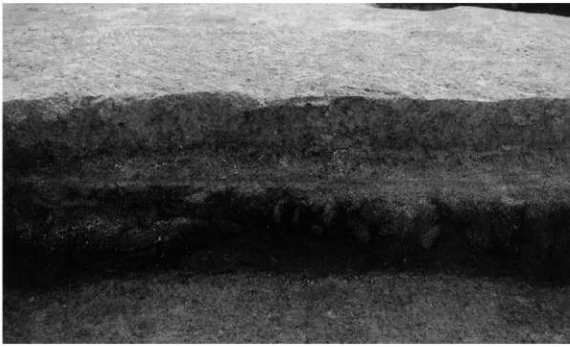


（2） 道路遺構

（1） 道路遺構（北から）

（2） 調査区西半道路部分（北から）

(1) 通行痕土層（北西から）



(2) 通行痕土層（北西から）

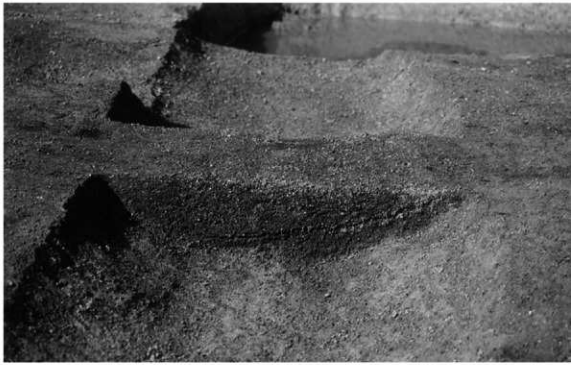
(3) 通行痕土層（北西から）

(1) 1号溝土層（北から）

(2) 2号溝土層（北から）

(3) 4号溝土層（南から）

(1) 6号溝土層（南から）



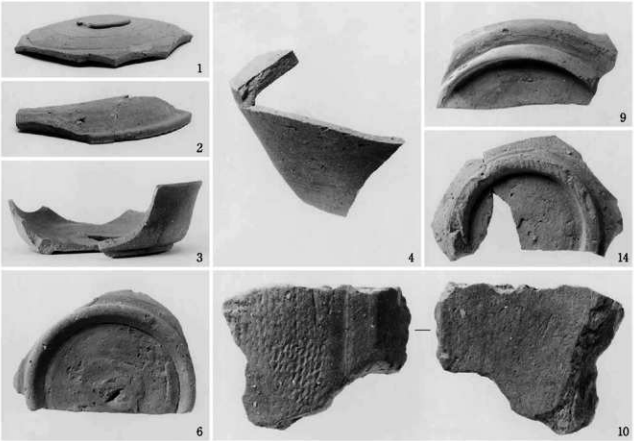
(2) 7号溝土層（南から）

(3) 11号溝土層（北から）

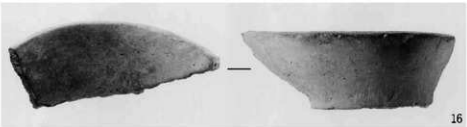
(1) 12号溝土層（北から）

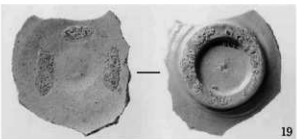
(2) 13号溝Q－Q′土層（北から）

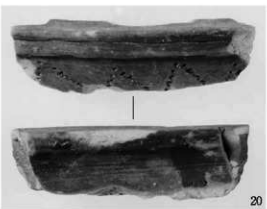
(3) 13号溝R－R′土層（北から）

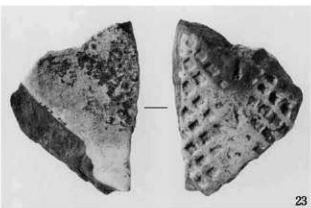


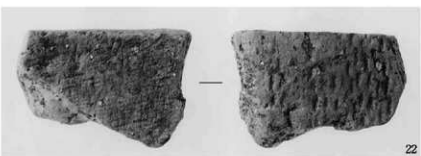
2・4・6号溝及びピット出土土器・瓦

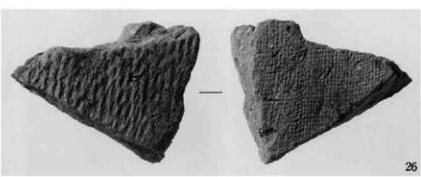




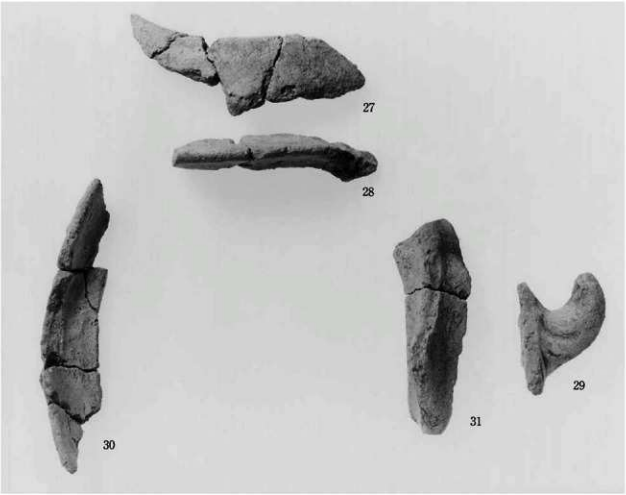




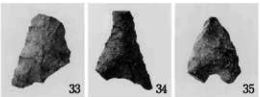


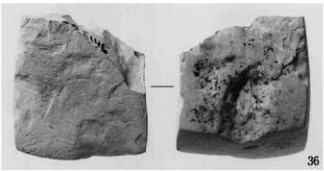


包含層出土土器・瓦



包含層出土土器





石器

3　次　調　査

（1） 先ノ原遺跡３次調査全景（北西から）

（2） 先ノ原遺跡３次調査全景（南東から）

（1） 1号溝土層（北西から）

（2） 2号溝鉄剣・弥生土器出土状態（北から）

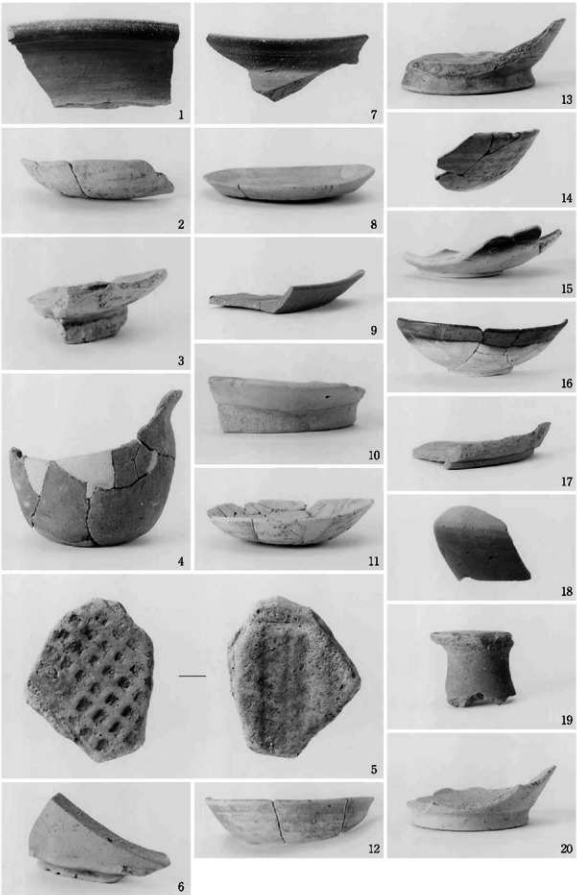
（1） 2号溝鉄剣出土状態（北から）

（2） 2号溝鉄剣出土状態（東から）

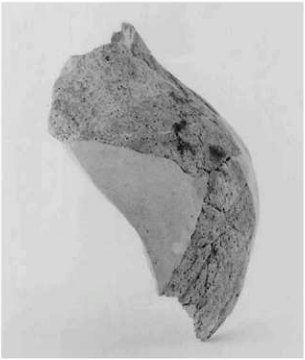
図版22

（1） 事前調査時鉄剣出土状態（南から）

（2） 事前調査時鉄剣出土状態（北西から）

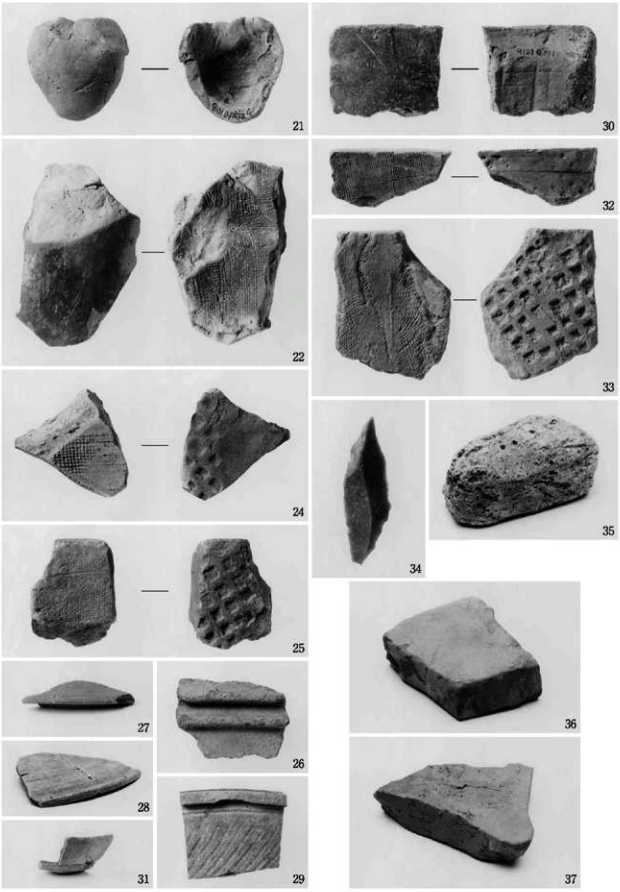


1号溝出土土器・瓦



2号溝出土鉄剣

2号溝出土土器・鉄剣



1・5・6号溝及びピット、包含層出土土器・瓦（21～33）、石器（34～37）

2号溝出土鉄剣X線写真

報告書抄録

ふりがな	さきのはるいせき
書名	先ノ原遺跡
副書名	福岡県春日市原町所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	春日市文化財調査報告書
シリーズ番号	第63集
編著者名	吉田佳広
編集機関	春日市教育委員会
所在地	〒816－8501　福岡県春日市原町３丁目１番地５　TEL　092－584－1111
発行年月日	平成24年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
先ノ原遺跡（さきのはるいせき）１次調査	福岡県春日市（ふくおかけんかすがし）原町（はらまち）３丁目１番	40218		33°31′47″	130°28′2″	平成２年10月23日～12月29日	1,480	自動車修理工場建設
先ノ原遺跡（さきのはるいせき）２次調査	福岡県春日市（ふくおかけんかすがし）原町（はらまち）３丁目１番	40218		33°31′46″	130°28′4″	平成３年10月19日～12月24日	902	音楽隊訓練場建設
先ノ原遺跡（さきのはるいせき）３次調査	福岡県春日市（ふくおかけんかすがし）原町（はらまち）３丁目１番	40218		33°31′52″	130°27′55″	平成３年４月25日～６月27日	800	排水管埋設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
先ノ原遺跡１次調査	官道	奈良	道路遺構 溝・側溝 ピット	土師器、須恵器 陶磁器、瓦 弥生土器	
先ノ原遺跡２次調査	官道	奈良	道路遺構 溝・側溝 ピット	土師器、須恵器 陶磁器、瓦 弥生土器	
先ノ原遺跡３次調査	官道	奈良	道路遺構 溝・側溝 ピット	土師器、須恵器 陶磁器、瓦 弥生土器、鉄剣	官道側溝に切られる溝から、弥生土器とともに大型の鉄剣が出土

先　ノ　原　遺　跡
―1～3次調査―
春日市文化財調査報告書
第63集

発行日　平成24年3月31日
発　行　春日市教育委員会
福岡県春日市原町3丁目1番地5
印　刷　株式会社　昭和堂　九州支店
福岡県福岡市博多区東比恵4-2-10